

明治 五年 月五日發行

第八號

女鑑第八號目次

在原業平妻



女　鑑

愼みてな怠りそ

迎へては送り、おくりては迎へつゝ、いつしか明治も五々の年をそ重ねつる。年の新なるとゝもに、婦人女子の心も改まり行くにつけては、その淑德美風はます〳〵世にあらはれぬべし。さては、敗德汚行の聞くにたへぬが如きことゞも、朝日にむかふ軒端の霜の消えてあとなきにいたるならむ。吾人はその必然るをよろこぶ餘り、思ふ事どもをかいしるして、猶その過なからむことを望むになむ。

昔、景行天皇の御代、東夷そむく。天皇、皇子日本武尊に命じて討たしめ

給ふ。尊伊勢に出でまして、神宮を拜し、倭姫命に辭申し給ふ。倭姫命ことの由を聞き給ひ、草薙劔を授けて曰ふやう、「愼みてな怠りそ」と尊その御誡を守りて、遂に東夷を平げ給ひぬ。

それ、日本武尊は、勇武人にすぐれたまひ、向ふところ敵なきが如くおはしき。故にかつてよく熊襲を誅し、諸所の叛賊をさへ服せしめ給へり。おもふに東夷を平げ給ふことも、またさはめて容易かりしならむ。されどもこれ、兇惡極りなき叛賊なれば、若尊の御心につゆの緩みのましまさば、その任を全くし給ふこと、いと難かりしなるべし。倭姫尊、そを明に慮り給ひてこそ、かくは尊を戒め給ひしなれ。その御意の深き、その御思の切なる、たれ人か仰ぎ尊びまつらざらむ。

人は怠りやすきものなり。また愼み難きものなり。その身みづからは、愼みに愼みたりと思へりとも、なほいかゞはしき行なきことを保ち難く、束の間も怠らずとうけはりたる人も、よその見る目には、なほつとめたりとのみも思はれざらむ。まして、塵ばかりも忽に心を持ちたらむには、思はぬことゞものいで來るぞ、人の世の常には有りける。あはれ、倭姫尊のこの御ことばは、ひとり日本武尊御爲なりしのみならず、天の下後の世の人々の、一時たりとも忘るべからざる、いともいみじき、いとも尊き敎訓にこそあなれ。

國は廣く、境ははるかなり。そが中に生れいでぬる人々、いくそばくなるを知らず。人一人いかにあればとて、その及ぼす所、何ばかりのことかあらむ。人の生命五十歳を過ぐるは稀なり。生命ある中の經營辛苦も、その身のはかなく消

えゆきなば、何の用をかなさむ。されば、身一つは、怠りたりとて、勤めたりとて、させることの無きが如しなど思ひて、己が身を心の欲するまにまになして、いと輕やかにふるまふ人、世になきにしもあらざるべし。これ大なる誤りなり。諺にも、「塵もつもりては山となる」といへり。一人一人の集りては家をなし、郷をなし、はては一國をなすを思へば、一人の勤むるところ、一人の怠るところ、皆これ國家の盛衰に關はること、疑ふべきにもあらずなむ。されば、一人道を行ひて一家おこり、一人徳をつみて一郷化すること、古今そのためし多し。まして、惡しき方は、その力の更に大なるべきは、いはでもしるかりぬべし。婦人女子は、男子よりも一しほの、感化力を有する者にて、社會の風儀はむねと女子よりおこるといへば、婦女たらんものわきて、心を用ゐざるべからず。

今試に一家にゆきて、その家庭を見よ。その婦妻の良否如何によりて、その子女の賢愚、家風の善悪に、霄壌の差あることは疑なきところなるべし。されば、軽きに似てかろからず、易きが如くにてやすからざるは、婦女の務なり。慎みて怠ることなきにあらざれば、その任を全くし、其の職を盡すこと能はざるべし。あはれ、新なる年をむかへて、心をさへ新にしたまへる世の婦女たちよ、自己の任務を全くし、その品位を高くせむとせば、いよ〱ます〱その性行をみかきをさめ、よろづ慎みて怠らざるにあり。倭姫命は、人を教へて「慎みてな怠りそ」とのたまひぬ。今の世の婦人女子の方々は、そを守るをだに難とせらるゝか。あらず。そを守らるゝのみならず、そを人に教ふるにも餘りありなむ。されど、さる類の多く世にあらはれざりしは、教育の道よろしきを得ざりしにや

よりけむ。吾人は年の改りたるとともに、その言に行に、世の摸範ともなりぬべき婦人女子等の輩れ出でむことを、切に望みて止まざるなり。

論説

女子の風は茶事の如くなるべし　　土子金四郎

近時女徳の敗壞甚しとは、女鑑記者の歎する所にして、而て己の大に感を同しうする所なり。徳儀の亂れたる原因一にして足らずと雖も、世人の漫りに新を貴び古を捨つる弊、其の最大なるものといふべし。凡そ事物をたゞ古しとして取らざるは、謂はれなきの甚しきものなり。況んや、よく其の事物を知らずして、漫りに古を捨つるものに於てをや。古きものにして善き所あらば、宜しくます

く之を研究して發揚すべし。徒に自己の才を示さんか爲に、淺薄なる新案新說を出すか如きは、識者の採らざる所なり。」本邦の茶事は其の傳來久しく、時に或はたゞ珍器の器具を弄するを事とし、却て節儉の主意に悖る輩なきにあらざれども、よく茶道の意のある所を研究すれば、取りて模範とすべきものなしとせず。己之を斯道の宗匠に聞く。茶道に四あり。曰く、和、曰く、敬、曰く、淸、曰く、寂と、和は則ち親睦の意、敬は則ち尊重の意、淸は則ち無垢の意、寂は則ち靜肅の意なり。女子たる者よく此の道を守らば、女德自修らん。夫れ女子にして、常に茶の主客相和し、交はるに、親切の心を以てするが如くに、身を處せば、父母に事ふるに孝、夫に見ゆるに貞、而して一家團欒の樂を得んこと必せり。又茶の客は主人とおもへとは、敬の字を說きたる茶道の敎なるが、女子も

亦、此の心を以て人と交らば、彼の父母を輕んじ、夫を凌ぎ、賢立ちて抗論するが如き、近時の弊なくして止まん。次に、茶事に物の清らかなるを尊ぶこと、前號の女鑑に出でたる白河樂翁公、茶室壁書にも、うつはものは垢つかざる樣に日々清むべしとあるが如く、女子は強ひて、紅粉を施すほどにあらずとも、勉めて身を清らかにして、見惡からざる樣にせば、自然禮儀をも壞さぬものにて、此の頃、折々見當れる半男、半女の異風も起らざるべし。次に又、茶席は、事物整然として其の所を得、進退盡く順席を立て、靜にして亂れざるは則ち寂の意なりとして、之を女子の行狀となさば、輕擧疎行の謗を免れん。之を要するに、貞淑嫻雅といひ、溫良從順といふも、和敬清寂の意に外ならざるなり

近時茶事世に行はれ、女子の學校にして、之を敎授するもの少からざるは、己

の大に喜ぶ所なれども、唯、點茶の手前を授くるのみにては、物足らぬ感なしとせず。早く學ぶ者をして、前述の主意を會得せしめんことを勉めざるべからず。聊か茶事を聞きて、女子教育の上に感する所を述ぶ。

女子の本分

椿　蓁一郎

本來女子は、男子の玩具に、供せむが爲に造られしものには非ず。若、之を男子の爲に、造られたるものと云はゞ、男子もまた、女子に隷屬するが爲に造られしものと云ふを得べけむ。固、斯の如き理由はあらざるなり。畢竟、各同等の地位に立ち、互に相依り、相助けて、以て人類の幸福を保全し、生々の功用を遂ぐべきものなり。其の間毫末も尊卑主從の、差別あるべきに非ず。さりながら、

男女既に天賦の體格を異にし、固有の能力を同うせざるによりて、其の務むる所の分際に於ても差別を生ずるは、自然の道理にして、決して人類の作爲に出でしに非ざるは明白なり。若、其の間に差別なきものならば、天の男女を並べ生せしを、果して何の理由なりや。終に、之を瞶々に歸せざるを得ず。

今、汎く、我國女子の狀態を視察するときは、未男子と同等の位地に立つものと云ふを得ず。男女の位地の甚しく懸隔するは、人類自然の道理に乖戻するのみならず。實に、社會の幸福にあらず。されば、之が品位を進むるの道を講究するは、當今にあたりて最も力を致すべき所の要務なるべし。然れども、徒に男女は同等なり、尊卑なしと云ふことを喋々して、其の稟性の異なるにより、自然務むる所の分際に、差別あることを省ざるときは、之に由りて言ふ可らざる

弊害を生ずべし。從來、女子敎育の結果に付て、世論の囂々たる所以、又、一派浮薄の女子が、輕佻の所行をなして、識者の譏笑を招くもの、偏に、此の見識なきに由らずばあらず。女子の品位を進むること、いかで、此等の輩が一片の理屈を、口舌の上に弄するに依りて、成し得る事ならむや。

女子の品位を進むるの道、豈、他あらんや。只、天賦の淑徳を修養して、其の本務を盡すにあるのみ、決して男子の間に伍して、之と角逐するの謂には非ざるなり。本務とは何ぞ、曰く。人の家の婦となりて、齊家の任を全うし、內助の功を遂ぐるにあるのみ。此の本務を盡して、而後に人の世に立ちて、他の侮慢を受けず、普、天下の男子をして、己を尊敬せしむべし。此は是れ、獨女子の利益の爲のみならず。實に邦國の進化と、人類の幸福とは斯く非ざれば、發達

することを得べからざるなり。
柔能く剛を制すると云へる古語の如く、元來、女子は男子を感化する所の至大なる德を有し、能く有髯丈夫をして、感奮興起、大志を樹立し、偉功を建てしめ、或は反省修養、氣質を變化し、德器を成就せしむ。古より忠臣烈夫、義士偉人か其の室家の爲に勵まされて、大業を遂げたる例少しとせず。而して此等は、特に拔群非凡の者の名を竹帛に留めたるに過ぎざれども、此の感化の功は、決して此の僅々たる例に止まるに非ず。古今東西、個々男女の間に、常に行はれつゝあるなり、只、其の境遇と其の智德との如何に由りて、事に大小隱顯の差違あるのみ。然れども、是れ賢良なる男女の關係に就きて云ふのみ。彼の薄德無智の儕輩の間には、此の靈妙なる感化の力は、微光だに放つことを得べか

らずとす。
凡、男子が世に立ち、事業を經營するに當たり、不幸にして室家相和せず、内政整はざるが如き事宜に遭逢せは、其の志念を挫折せざらんと欲するも得べからず。結局家を壞り、業を墜すは勿論、甚しきは敗德汚行、風俗を壞亂するに至るも、是に起因するを多しとなす。而るに之に反して、内に家政の心に關するものなく、又、旦夕勞を慰め、心を勵ますの内助あらば、千辛萬苦も辭するに足らず。險惡なる世路も厭ふに足らず。常に勇壯快活、一意事業に身を委ぬるを得べし。何の事か、また成らざるを憂へん。之に由りて、德行おのづから修まり、高尙なる恩愛の情相融和して、互に愛慕尊敬するに至るは、人情の自然なり。此の如くして、而後に家道興隆すべし。風俗善良に赴くべし。邦國の盛

運望むべし。而して女子の地位必進むべきなり。之を是れ女子の本分を盡したるものと謂ふ。嗚呼女子の勢力も亦大ならずや。願はくは、世の女性たるもの、常に其の地位の尊くして、本務の甚だ大なるを思ひ、夙夜智徳を磨勵して怠らず、其の向ふ所を謬ること勿れ。

史談

在原業平妻の傳

井口隆太郎

伊勢物語に、在原業平の妻の事を載せたり。後世種々の説ありて、妄誕となす。「風ふけば」の歌は萬葉集にありて、長田王の伊勢の齋宮にいでます時、山井のよめる所なりとぞ。されば、此の歌よりして、伊勢物語作者の附會して、作り出でたる妄説にもやあらん。然れども、伊勢物語は、歷史の一端を補ふ所尠なからざ

れば、業平の素行より考へ見るも、かゝる事實の無にしも非ざるべければ、或は此の歌によりて、業平の妻の、貞淑なりし事を、顯はせし者なるやも知るべからず。假令妄誕の說にもせよ。事頗る貞淑にして、後世女子の摸範ともなるべければ、此處に其の大略を掲くる事とはなしぬ。されど、かゝる確實ならざる事を、史談の欄內に掲ぐるはいかゞなど、咎めむ人もあるべけれど、其は事の美談に渡るをもて、幸にゆるし給ひねかし。

在原業平は、歌には工なりしかど、行正しからず、色にのみ耽りて、云ふかひなき人の如く、世に云ひなせど、然はかりにも非さるが如し。惟喬皇子の志を失ひ、蟄居し給ひし時には、常に此の業平のみ、獨りまゐでゝ、御心を慰めまつりし事などより考ふれば、其の誠心の見るべき處なきにしも非ざるがごとし。心を月花にそめ、一生を世の外に終りしも、或は皇子の志を得給はざりしに、基づくならんか。業平幼き時、隣家に一人の娘あり。未ふりわけ髮の幼きものなれども、容貌いと美しく、心ばへも正直なりしかば、常に行きかひて、いと睦しくかたらひけり。業平も、亦、容貌世の常ならざりしかば、遂に親と親と計らひて、行く末は、夫婦にせんと、互

に約を結びぬ。然れは、業平も引く手あまたあるにも係はらず。其の娘と、鴛鴦の契をむすひ、うらなく暮し居たり。固より業平は、かたち世に勝れ遠きも、近きも、言ひ寄る者、あまたなりしが、遂に河内の國のある所に、女出で來て、常に行き通ひけり、大方の女ならば、嫉み怒り恨みもすべけれど、此の妻はいさゝかもさる心をもたず、顔色にこやかに、止めんともせで、いと快よく出しやる事、常に變ることなし。されば、業平も、いと心に不審をいだき、我が彼の女の元へ通ふことは、かねて知る事なるに、一言もさる事とも云はす、嬉しげにもてなすは、他し人をや設けぬらんと思ひ、或る日、月あかき夜、夕つかたより、例の河内へ行くとて、家を立ち出でけるに、妻はいつもの如く、いと快く出しやりぬ。業平は、道より歸りきて、前栽の中に身をひそめ、妻の樣子を窺ふに、妻はさる事とも知らず。いと花やかに化粧して、やかて琴を持ち出で、爪音いとたかやかにかき鳴らし「風ふけば沖つ白浪立田山夜半にや君がひとりこゆらん」と、聲はがらかに、歌ひ出でぬ。歌の心は、今宵わが夫の越えて、河内の國へ行き給ふ道には、立田山と云ふ山あり。其の山には盜賊が毎夜出でて、人を脳ますと云ふことである。其の恐しき立田山を、

わが夫は、夜中に獨りて、越えて行き給ふのであるが、如何にも危い、氣遣な事であると云ふ事にて、業平の所業を惡しとも思はで、返りて心配する樣子なり。誠心の至る所鐵石をも通すとかや。業平も、此の妻の誠心に感じ、我にもあらで、前栽の中より飛び出で、涙を流して、妻にむかひ、此迄の行の過れるをわびて、其の後は河内へ行く事を思ひ止りたりとぞ。世に嫉妬の心ほど恐しきものはなし。これによりて、身を失ひ家を亡し、國家を亂るもの、古より數ふるに遑あらず、世に困難なる事多しと雖も、嫉妬より起る困難より困難なるもの、またあるへからす、而して此の困難の依りて起る所の者は、多く內閨にあり。內閨は女の司どる所なり。別けて、嫉は女の疾と書けば、女たるものは、尤此處に愼まざるべからず、故に常に此の業平の妻の如く志したらんには、如何なる場合と雖も、困難を見ずして、事は治るべきなり。世の女子たちよ、妻たる人も、娘たる人も、萬に此の心をもて、行ひたらんには、業平の妻にも、耻ぢざる貞女となりぬべし。

松田助八か娘さつ女の事（承前）

竹野節雄

澤野は、この時しも、茶の間にて、おすはといへる女中を叱りてありけり。さつは、いと驚きたる躰にていへるやう、「主人みち事、今朝より、目まひするとてなやみ居しか、唯今氣絶し侍りぬ。とみの事とて詮術もなし。いとなめなることながら、一通御覽せられて、よきにはからひたまひね」と、涙ながらにいふ。局聞て、「そは癪の起りしならん。醫者呼びて見せなばよかりなん。妾までを」などつぶやきつゝも、下女のひざを連て行く。おすはも跡に引續きて行きけり。さて、澤野は、おみちが部屋にいたり、襖押し明けて、局か見舞に來りしそと云ひつゝ、屏風の中に入らんとするを、さつはすかさず飛かゝり、胸ぐら取り、聲あらゝげていへるやう、「此の老ぼれめ、よくも大事の御主人に、草履蹴つけて、恥かゝしめしよな。主人は、武士の女なり。辱受けては、人に面向ならずとて、かくは自害せられしなり。能くも、口先もて人を殺しつるよ」といひさま、おみちが持ちたる短刀にて、喉を目がけて三刀四刀刺貫けば、忽息は絶えたり。おすはは、これを見て驚き叫ぶに、人々も皆あわてふためく。此の騷動を聞きて、奥家老堀治郎大夫、奥目付小池利右衛門、馳來

りぬ。さつは靜に短刀を置き、襟かきあはせ、容改めて、兩人に向ひていふやう、「妾は道が下女、さつと申ものにて侍り。主人道ことは、お局澤野どのに耻しめられて、遂に自害し侍ぬ。去ば、お局さはのどのは、とりもなほさず、主人の仇と思ひ込みしまゝ、かくは、殺害致し侍りぬ。この上は、如何なる御仕置仰付らるゝとも、つゆ怨とはおもひ侍らず」とてひれふしければ、治郎大夫聞て曰はく。「主人の敵は、倶に天を戴かずといへり。汝かよわき女の身として、大志を遂げたることいと神妙なり。様こそあらめ、撿使の來までは、しばらく部屋に愼むべし」とて、廣敷番三人に守衛せしめて、此の趣周防守へ聞え上げゝり。卽て、撿使として、岡島某、大目付、兩人奥家老立合にて、糺問し口書を認む(さつか口書の趣前に記せし如くなり、澤野か下女、ひさ茶の間すは口書の趣は、前文の如し、よりて爰にしるさす)さつが持行きし、小文庫、文箱封の儘なりしかば、撿使の人々開き見るに、中に小道具ありて、文は折返しなりしか、上包ともに自筆なりけり。其の文にいはく。

御二人様、いよ／＼御機嫌よく御ざ遊ばし、御嬉しくぞんじまゐらせ候。まづ／＼まをしわけ候。私事何とも一分たちがたき御事御ざ候て、自害いたし候。

その譯も、申上たく御ざ候へども、さつにゆふべそれとはなしに物語りいたしまゐらせ候、こま〱申わけ候ては、御なげきのうへの、御はらたちをかさね候やうに成まゐらせ候ことゆゑ、文には申上ず候。しぬはどの御事に御座候へは、よく〱の事と恐れながらおぼしめしやり被下べく、御奉公のうちも、御恩のこと少もわすれまをさず、百萬に一つも御恩送り申さず、是のみは草葉の影にても、氣にかゝり參らせ候。かならず〱、御なげき遊し被下まじく候、只々前世の約束と思召御あきらめさせられ、罪のほども輕くなり、佛果の種とも成候やうに、さかさまなる御事に御ざ候へども、御供養遊ばされ下されかし、最早おつつけ、此譯申參り候はんと存じまゐらせ候まゝ、さやう思召、御恩の上なからよろしきやうに御取計ひ、見くるしからぬやうに被仰付下さるべく候。わけて申上候。文庫の內に十四五色も、小道具御坐候まゝ、夫〱に御見わけ、かたみ遣はされ下されべく候。此內に妙養院樣御ながらへのうちに下され候、地藏樣と紙包上參らせ候、御ともし樣へもおもしながら、上させられ可被下候、九重の御守、懷中鏡は、朝夕御前へ出候度ことに、私か影を移し候まゝ、御逢遊し候と思召、御覽下

さるべく候。かならず〳〵御なげきの種と思召下されましく候。三五郎へは殿樣よりいたゞき候御香合、御鼻紙袋遣度、をみやへは、奥樣よりいたゞきまゐらせ候、御かんざし、子安貝つかはし候まゝ成人の後、姉をおもひ出し候へと、遣はされ下さるべく候、下谷の御母樣はとめ、仁右衛門樣、半平殿、おかせどのなど、其外皆々樣へ、御暇乞仰られ下さるへく候。小田原の叔父樣へも御忌かゝり候まゝ、定て仰遣され候はんと存まゐらせ候。其折から養閑樣へ、此觀音樣の軸の物遣さるへく候。叔父樣へも、亘どのへも、何なりとも少しつゝ御わけ被下べく候、本所の乳母へ、此金袋封のまゝ遣され可被下候。私をさなき時より、いとおしみもりたてくれ候まゝ、垢つき候ものにても遣し度候へども、俄のことゆゑさつばかりへ遣はしまゐらせ候。是さへ道のほど如何とおんじ申候。何方樣へも心の程には成難御座候、乳母はわけてなげき候はんと、今見るやうに思はれまゐらせ候。其外どなた樣へも、御暇乞能々願上まゐらせ候。さつ事も、かやうの事夢にもしらず、此文御よみ遊し候はゞ、初て驚候はんとぞんじまゐらせ候。年月の内、懇切にいたはりくれ候まゝ、よく〳〵仰せられ可被下候。いつまで書候て

も盡せぬ御波殘ゆゑ、御暇乞計りと申のこしまゐらせ候。不孝ものとて、御父上樣御しかり遊し候はんとぞんじ上候へども、定て業因と思召下され候やうに、幾へにも御わび遊ばし下さるべく候。おもひもうけし事ながら、今はになり、涙に目もくれ、あとさきもしどろに見へわかず候まゝ、早々まをしあけまゐらせ候かしこ。

みちより

御かもじ樣

御もとへ

撿使の人々見をへて、朋輩の女どもに此は道か自筆なりやと尋けるにみな自筆なりとこたへけり。猶この外に書置はあらずやと探せば、枕もとなる短册に一首の歌をぞかいつけたる。

藤の花ながきみじかき世の中に消ねゆく身にぞ思ひしらるれ

卯つき三月　岡本氏女道　生年二十一歳

是を見る人皆涙を催しけり(つゞく)

家政

育兒小言（七）

武谷水城

是れまで述べし事實に依りて見る時は、女の腹は假り物杯云へる諺の、取るに足らぬは勿論なれども、其反對に、子女は全く母の子女にして、却て父は假りものとも聞へつべし、もとより父の精母の血相合ひて、受胎爲すものなれば、さる道理無きは、云ふ迄も無き事なれども、其生れて後の關係より云へば、先づ父二分、母八分と見て可なるべし、其深き理を述んには、胎生學とて、人の身の母の胎內に芽ぐむ理由より、其成育なせる有樣と、遺傳とて、父母若くば祖父母等の、体質心性を子孫に傳ふる理等を、究めたる學理と、（此等の學、猶幼稚にして、不明に屬するもの多けれども）、又心の作用、則ち智慧感情意思等の、發動成育する有樣より、習養とて、人の身を取り圍みたる種々樣々の事柄に依りて、小兒の身も心も、其通りに化せられて、終に亦一種の性質遺傳と爲る譯、等を究めたる、學問等とに依るに非れば、知り難きも、其事實を一言に云へば、人の身の根元、則ち胎を受る始めに於ては、

父方母方各五分々々の調合にて、成りたるものにて、中には父にのみ似たるものの有り、亦全く母にのみ似たるもの有と雖とも、平均する時は、五分々々と知るべし、然るに受胎して後、十ヶ月の間は、全く母の血にて養はれ、生れ出てゝ後數年の間は、亦全く母の乳養を受て、成長爲すが故に、此長き間に、母より受るもの、特に其中にて、彼の第二の天性と爲り、遺傳と爲るべき習養は、母より受る事最も大にして、父にハ殆と少しの關係も無し、されば茲に至りては、凡て父二分、母八分位の關係と心得て、差支へ無るべし、古人か父の嚴毅、母の緩裕相俟ちて、子女の性を全からしむと云へるは、さる事ながら、母固より亦嚴毅ならざるべからず、且母は主任にして、父の關係薄き事は、上に言ふが如し、

前に度々述へたる感化とは、物の裏面より、識らず知らざる際に、自然に摸範を示すものにて、此く爲べしと、口にて言はずして、自身の行爲を以て、自然に示すものと云ひ、敎訓とは物の裏面より、明らさまに此く〳〵爲べしと、口上にて命令を爲して、敎るものを云ふ

此二ッのものは、子女を成育するに、缺くべからざるものにて、いづれも偏重すべ

からずと雖、寧ろ、感化の方を大切と爲す、特に學問文字抔の無き母親と雖、身を修むる事嚴にして、行正しく、法ある時は、子女は必是を見習ひて、正しき性と爲るべし、之に反して文字もあり、學問も深き母親にて、假令敎訓のみは行屆くとも、自ら身を修めず、行ひ正からずして、萬事に法なき時は、子女亦必之に倣ふべし、讀書學問も其眞の用を爲さず、これにて二ツのものゝ輕重を別つべし、

女禮式（承前）

有住齊

一肴出し樣

中皿小皿等に小串、作り躬、酢びての類を盛りて、中酒の肴に出すなり、膳に据ゑ、吸物膳の向ふへ持まゐり、上座の方に置き（正面座ならば、右の方に置くべし）皿ばかり取りて、吸物膳の內に付込み、空膳を持て立つなり

一湯出し樣

中酒すみて後、吸物膳を引き、湯を出すなり、湯桶の口を向にして臺に据ゑ、持出て、中座して見合せ、貴人の左の方に持まゐり、右手にて湯桶のつるを取り、

左手を口の下にそへてつぐなり、湯はまづ主人にてこゝろみをつきて後、客につぐの故實あれども、時宜により、直ちに客にまゐらするも、くるしからず

湯にかぎり、主人試するにあらず、饗應の飲食は、一切試し鹽梅するとなれば、最後の湯のこゝろみして、一切の飲食物こゝろみしたるを表示なり

一 水出し様

式正の時は、湯桶につゞきて、水指を持出すべし、右手に水指の手を持ち、左手を下にそへて持出て、下に置き、扣へ居て、客の乞はるゝ時進みまゐらすべし、湯桶入りたらば、見合せ入るべし、但婚儀には水さしはださぬものなり

一 菓子出し様

緣高に盛り、三方或は足打に据ゑ、持出で、本膳と引替にするなり、干菓子は、陶器等に盛り持出て、濃茶々碗と引替にすべし

一 濃茶の出し様

服紗を四つにたゝみ、角を向にして、茶碗の下に敷き、臺に据ゑ、持出べし、菓子を引き、其あとにまゐらすべし

此濃茶と云ふものは、茶會と云ふものゝはやり出たる頃より、饗膳のあとにつぐ習しとなれり、當時飯後に濃茶を出す樣、亭主の手前にて持參の時は、客人手水をつかひ無刀に成りて、敬ていただき、これをのむなり、一向茶會の禮の如し

一薄茶出し樣

臺に据ゑてまゐらせ、下座に扣へ居り、客呑み終りたらば進み出て、茶椀を下ぐべし

濃茶薄茶の法は、一躰禮家のさし圖すべきにあらず、茶道のものゝ心得にまかすべし、されば湯水までの心得を云ふべけれども、傳書どもに此名目のある故、いさゝか辨へ置くなり

行酒飲食程式

一上盞の盃受け樣付返進樣

貴人の盃を賜はる時は、まづ三尺ほどすゝみ出て、酌人の來るをまつべし、酌人來らば、酌人の方にむかひ、盃を取下し、たまはりたしと辭退すべし、扨酌人盃

な取りおろさば、兩手に受け、左手にうつし、右手をつき、貴人の方に向ひて、右手をそへ、兩肘をつき頭を低れ、敬みて戴き、又右手をつき、酌の方に向ひ、酒をうけ、又貴人の方に向ひ、兩手に盃を持あげて飲むべし、酒を飲む時は、貴人の前にても、少し頭をもたげて呑むものなり

返盃せよとある時は、兩手にて盃をもち、下を捨て（凝濁を捨るを云、中古の俗、凝濁を音借して魚道と云、此時勝手より下捨の土器を、盆に据て持出べし）左右の拇指にて、右左右と三度露をきり、酌人に渡すへし、酌人盃を貴人の前に進め、貴人盃を取上けられたる時謹て一禮すべし、初め盃を賜はる時、辭讓の上、自盃を取りおろさば、兩手にて三方を引よせ、貴人の方に向ひ、右手にて盃をとり、左手にうつし、右手にて三方を右側におき、前に云ふが如く戴くへし、若かやうなる時は、返盃にも、自盃を三方にのせて、酌人に頼むべし、又一旦次の間に下り、再應辭退の上、返盃するは、至極の敬禮なり

家內衛生（七）

三笠舍主人

食物の續き

鳥肉中にては、鷄肉を第一と爲す、滋養多くして消化し易く、供給易くして需用最も廣し、病弱の人抔用る時は、其効力或は牛肉に讓らず、但老鷄は肉硬くして消化遲し、鷄肉に次ぐものを鳩肉とす、脂肪過多ならず、滋養の効多し、鴨、家鴨、の肉は鷄肉よりも脂肪多し、病人抔に多く用るは良からず、此外總ての鳥類中、殆ど食用に供せられざるものなく、又毒あるもの無し、只猛鳥類と名くる一族のもの、則鷲、鷹、鳶、の類は其肉硬くして食ふに堪へず、又一種の海鳥、及び烏も或種のものを除く外、食用に供せず、燕鳥の如きは、本邦にて食せざるも、歐米の國々にては常に食用に供す、特に燕鳥の造りたる海藻の窠は、盛饌として賞與すと云ふ、總て多くの水鳥は、陸鳥よりも脂肪多く、或は肉硬くして、消化遲し、但陸鳥にても野鷄の如きは脂肪過多なり、

何に限らず、雄鳥の肉は牝鳥の肉よりも硬くして、味亦美ならず、されども其睾丸を切除く時は美味と爲る、故に雄鷄の如きも、其睾丸（肛門內の左右に在り）を切り除き置く時は、肥大して其肉美味と爲ると云ふ、

魚類にては鯛、鱚、鯉、鮒、等を最良とす、鯿、鱸、鰈、比目魚、大口魚、鰡「こち」等之に次く、脂肪多からず、美味にして消化し易く、病者、妊婦等に用ゐて宜し、多くの青魚類れ、脂肪多く中には腐敗し易きもの有、流行病ある時等は、最も注意して撰用すべし、又鰻、鱒、等れ多量の脂肪を含むか故に消化遅し、多食すへからず、總して魚肉は鳥獸の肉よりも、蛋白質を含む事寡く、亦血液少くして水分を含む事多し、故に其滋養の効、鳥獸の肉に劣るも、獸肉を多食せさる國柄に在りては、缺くべからざる貴要の食料なり、

魚には中毒性のものあり、印度海に産するものに多しと云ふ、又「エレキ」魚と稱ふるものは、多くの「エレキ」を含むものにて、人之に觸るゝ時は身強直すと云ふ、本邦に産する豚魚は、中毒性の魚なる事、人の知る處にて、是を食して爲に命を殞したるもの少からず、近來醫學上の試驗に依り、其毒は全く子宮内にあるものなる事、明なるが如し、兎も角、毒れ臟腑の内にあるに相違なければ、料理法に注意して、肉のみを食ふ時は、中毒の恐なかるべしと雖、必須のものに非されば、寧ろ食はざるに如かず、又乾豚魚と稱して、九州中國抔にて製するものあり、一種の豚魚

を乾して製したるものにて、是は全く無毒のものなり、此等の中毒性の魚を除く外は、總て食用に供し得られざるもの無し、但鯖、比目魚、蟹、等の、種類及時候に依り、是を食して、皮膚に小瘡を生ずる事稀にあり、多くは三四日にして治す、魚肉も亦煮て食するを最良とす、炙くも亦宜し、酢に能く浸して食するも亦可なれども、上の二法に、刺身は極て新鮮の品を、適宜に用うべし、青魚屬則鮪、鰹、鯖、の如きは、皮下に小虫在るもの少からず、此虫の卵を食して害を招く事有、成るべく生食せざるを宜しとす、又諸種の魚類を、蒲鉾「はんぺん」等に製して食料と爲す。何れも滋養の効あり、但し腐敗に傾きたるものにて製する事あり、注意して撰用すべし、魚肉は鳥獸の肉よりも、腐敗に傾き易し、故に多く乾魚、鹽魚、と爲すも、姦商既に腐敗に傾きたるものを以つて、是等に製する事有、共に一種の穢味あり、注意して撰用すべし、

新鮮の魚は、鱗色鮮光あり。目の角膜透明にして、肉硬し、其陳きものは、角膜透明ならず、魚身柔軟にして腹部破れ易し、此等の陳きものは總て用うべからず、特に青魚類は早く腐敗に傾き易し、夏時は最も注意すべし、魚類の誤用より、流行病

の誘因を引興す事少からず、又水銀、鉛、銅、若くは砒石、抔の鑛坑に通じたる、川澤の魚は害を爲す事あり、食ふべからず、自ら斃れたるものも食ふべからず、貝類も亦一般に食用に供するも、消化は遲し、病患の人などには用べからず、但其中にて、牡蠣は滋養多く消化し易く、食ふに宜し、但牡蠣には時として毒ある事あるも、極て稀也、廣島抔に産するものは、嘗て毒ある事なし、牡蠣は我邦に多く産して、小民の口にも上るものなれ共、歐洲にては極めて少く、價亦最も高價にして、無二の珍味とす、我が安政五六年の比、佛蘭私の一小島に、初めて蕃殖せしめしに、二年にして莫大の利を得たりと云、又蝦、蟹、の類も滋養の功多しと雖、消化遲し、蛸魚は消化遲し、時として中毒する事あり、注意すべし、

茶事（承前）

藤井行麿

○一日樂會また終日五會ともいふ、五人社をむすび、主客の順は鬮どりにて定め、壹番にあたりし人朝會、二番目の人朝飯後をなし、三番目の人正午を催し、四番目非時、五番目の人晩なり、時はづれの二會は、所謂菓子の茶ゆゑ、吸物を出し、とり

肴、八寸だけにて酒出すとも適宜にすべし、朝正午晩は懐石なり、晩のふるまひは麪類等にして、飯をぬくもよし、とめは附薄茶にして、退散するもよし、次會にあたりたる人薄茶を飲ず、はやく宅にかへりて、用意をなし、客を待べし、

○三轉は書院、小座鋪、數屋等すべて三所に仕掛へ、いづれにも釜をかけ置、膾炙、濃茶、薄茶を所々にわかち、饗應するなり、また一會始終すみて後、別間に請じて酒を出す、これは後だんとも、開きともいふ、

○輪會これは世に所謂七事にて、最初素床にて迎へ込、掛物かくるより、次に香を炷き、三に點茶、四に花を挿、五に炭手前。亭主それ〳〵道具を運び付置き、是とおもふ客に、まくはりてなさするなり、人數おほければ床に三幅對、初炭、後炭、點茶も濃、薄わけてあつらへさするもよし、

○野懸春秋氣候のよきころ催ふすべし、六月晦日みそぎはらへの夕、利休加茂のたゝすの森にて、大佛妙法院宮、豐太閤、家康公の三貴を招ぎ催したる時は、青竹にて土間に三球打の如く、三つ俣を立、それに自在竹をつるして鐺をかけ、松毬を焚て湯を湧し、旅箪笥に面桶の建水を用ゐ、茅萱ふきはり立柱のかこひ、土間に疊を

敷て、點茶の時足打折敷にかまを揚け、ゆを汲て上より流しかけ塵を掃ひて點られしとぞ、せめひもの釜にわら封ありし用意、おもしろかりしならむ、

○茶香服と書て茶かふきといふ、これを茶歌舞伎とかくは、假字を用ゐたるまでにて、茶事に歌舞伎の意はさらになきことなり、茶の服、加減色香を稱するなり、こゝかしこかはりたる茶園の茶をとり、品類をわかち、初に試の茶を點て客に爲喫置またこゝろみさせぬ茶を一種とりまじへ、其數種の茶をのちに點出し客にあてさするなり、此仕方は、看版塗板に胡粉を以て宇治の園名を記し、棚あるひは床の上に茶入を取合せ、長盆に載せて、帛を覆ひ飾り置き折据を持出て上客にわたし、茶碗を運び試みの茶をのまし、名刺に客の名、茶の名をしるし、それ〳〵にわたし置き、長盆をおろし、直茶を點る、すみてのち長盆を執事のまへに持行き、茶入のふたの裏にしるしたる茶名を記にのせ、あたりおはき人に其記をまゐらするなり、仕構とりあつかひかた、くはしくは口授ならではとけかたし、

○廻點、亭主道具を運び付、それより客にたてさするなり、末客より點はしむるなり、末客の點し茶を末座次居の人飲み、三番目起ちて點茶せしを末坐のみ、二番の

點しを三番呑む、此順に上客までゆき、上客の點てしを亭主のみ、亭主の點しを上客喫て、亭主其儘しまひ取入るゝなり、（つゞく）

學園

和歌のしるべ（つゞき）

井口隆太郎

第六動詞三段活

		加行 來	佐行 爲	奈行 往
結にならず	第一段	こ	せ	な
結にならず	第二段	き	し	に
一段の結	第三段	く	す	ぬ
二段の結	第四段	くる	する	ぬる
三段の結	第五段	くれ	すれ	ぬれ

右に擧げたる動詞は、語尾の三段に變り、第四段第五段に、るれの副りて活く故に、三段活と云ふ、此の圖も前と同じく、結れ三段ともに語尾異なり、此の圖に活く動詞は、奈行に死ぬと云ふ動詞の活く外にはなし、又、佐行の爲は、下二段活のはたらきもありて、兩方に活く動詞なり、但し、結はいづれも同じ語尾なり、又、奈行の往ぬ死ぬは、四段活の活もありて、此も兩方にはたらく、然れど二段の結と三段の結は異なり、心して見るべし、

又、佐行には、體言及漢語などの、變りて動詞となりて活くこともあり、例へば、物す、欲す、舞す、安ず、倶す、轉ず、制す、變ず、奏ず、秘す、命ず、怨ず、論ず、等の如し、

第七動詞四段活一種

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
	結にならず	結にならず	一段の結	二段の結	三段の結
良行 居有	ら	り	り	る	れ

右に擧げたる動詞は、四段活と同じく語尾の變じて、四段活は第三段の語尾るなれども、此はりとなる故に、四段活一種と云ふ、此の圖は、四段活と異なりて、結は三段ともに語尾異なり、特に注意して見るべし、

此の圖に活く動詞は、圖に擧げたる外に、侍り、御座りと云ふ二つの動詞あり、其の餘は、皆四段活良行の動詞と知るべし、

此の圖には、四段活或は次の久志幾活より、復りて活く動詞あり、例へば、咲けり、置けり、成れり、住めり、打てり、無かり、靜けかり、照れり等の如し、此は皆咲きてあり、置きてあり、成りてあり、住みてあり、打ちてあり、照りてあり、（以上四段活より復る）無くあり、靜けくあり（以上久志幾活より復る）等の約まれるなり、

此時は、結はすべて四段活一種の圖にしたがひて結ふべし、

	結にならず	結にならず	一段の結	二段の結	三段の結
	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段

第八動詞久志幾

加行	佐行
淺悲靜愛	
く	
く	
し	
き	
けれ	

右に擧げたる動詞は、加行と佐行と混合して活く動詞なれば、其の語尾の順序より、久志幾活とは云ふなり、此の圖も前と同じく、結は三段ともに語尾異なり、

此の圖に活く動詞は、いと多ければ、聊、左にあげおくべし、

善し、惡し、青し、赤し、怪し、潔し、寒し、暑し、遠し、近し、苦し、黒し、
暗し、奇し、淋し、疎し、美し、少し、多し、喜し、悲し、高し、低し、長し、
短し、樂し、悲し、安し、晩し、戀し、廣し、狹し、太し、細し、新し、古し、
久し、涼し、烈し、齊し、虚し、嬉し、遙けし、穩けし、健けし、朗けし、鬱悒し、可笑し、强女し、朧けし、忌々し、雄々し、愛たし、明けし、露けし、優美し、長閑けし、

猶、此の外にもあまたあれど、其はこれに準して知るべし、

以上說く處、歌を讀むには必要なる者なれば、豫て熟讀暗記して、忘れざる樣心がくべし、

百人首和歌の解（つゞき）

井口隆太郎

平兼盛

しのぶれどいろに出でにけりわが戀はものやおもふと人のとふまで

自分が心の内に、人を戀ひしく思つて居る事を、外にあらはすまいと思つて、餘程しのんで堪へて居るけれども、始終心にくよくよ考へて居る所から、つい顏の色にあらはるゝ樣になつた、此のごろは、人か自分に何か物おもひでもして居らつしやるか、どうもお顏のいろが不斷とはちがふ、などゝ問ふやうに成つてきた、これから考へて見ると、もはやどうも、自分が戀は隱しきれなくなつた事である、

壬生忠見

戀すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそおもひそめしか

自分が戀を爲ると云ふことは、誰もしらない筈だから、よもや浮名はいまだ立つまいと思つて居たのに、何時の間に誰がどうして知つたのかしらん、まあだ立たない筈だに、はや立つてしまつたはい、もと自分が戀をしはしめたのは、誰も人のしらぬ樣に思ひそめた事であるのに、もはや誰しらぬ者もないやうに浮名か立つてしまつた、どうも臭いものには蓋が出來ないものである、

清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつゝすゑの松山浪こさしとは

あなたと私は、一生心がはりなどする事はあるまいと、いつぞや契を結んで置きましたなあ、あの時はあなたも私も、共に嬉しさのあまりに、涙で袖をびつしよりぬらし、其の袖をしぼり〳〵して、あの奧州の海邊にある、末の松山と云ふ高い山を浪が越えない以上は、此の契は決して變ることはないと、堅くちぎつて置いたのに、此の頃はなんだかあなたのそぶりがをかしい樣で、若しも心が變りはせんかと、どうも氣がもめることである、

此の歌は此の如く云ひやりたれバ、先方より「君をおきてあだし心をわがもたば

すゑの松山浪もこえなむ」と返事せりとぞ、

中納言敦忠

あひ見ての後のこゝろにくらふれはむかしはものをおもはさりけれ

まだ戀しき人に逢はない前は、朝夕にくよ〳〵物を考へて、どうしたら逢へるだらう、こうしたら都合がよいだらうと、色々に思ひ煩つて、此の位苦勞をする事はない、早く逢つて志を遂げたら、さぞ心持がさつぱりして、愉快であらうと思つて居たが、さて逢つて見れば、中々心持がさつぱりする處ではない、猶一層心配が多くなつて、非常に氣きがもめる、此の今の心に比べて見るとまだ〳〵逢はないむかしは、物思ひをしなかつたのであるわい、

中納言朝忠

あふことのたへてしなくはなか〳〵に人をも身をもうらみざらまし

世の中に、戀ひしい人に逢ひたいと思へば、逢ふことが出來るものだから、其の時は嬉しいけれども、其よりいろ〳〵な面白くない事が起つて、不愉快千萬な事になる、だからいつそ此の世の中に、戀しい人に逢ふと云ふことの絶えてなかつ

たならば、面白くない不愉快なことなどは起るまい、そうすると、返つて人をうらんだり、我が身をかこちたりすることはあるまい、さて／＼世の中に逢ふことのあると云ふのは、きついわるいものではあるわい、

漫録

清少納言（承前）

小野利三郎

某文學士、又嘗て論じていはく。

清少納言の心ばへは紫式部とは全くうらうへにして賢らだちざえがるをばこよなく面白きことに思ひ草紙の中には我身の世にほめそやされし事などをもあまた書き載せたり門のことにつき大進生昌をなじりたるなどは清少納言が賢らだちたるを好みたる一例として見るべきなり云々

氏の考は、一向紫式部の徳を稱揚せんとせる野心のために、その正鵠を誤たれたるなり。大進生昌をなじりたりとは、既にその言を失せり。納言は、大進の門のおのが豫想とたがひ、ために耻辱をうけしより、あやにくに思ひて、何どてかその門を狹く作り給ひし、と怨言せしなり。家のほど身のほどに合せてと答へしより、漢の于定國の故事をひき、門ばかり家のほど身のほどにこしらへて、高く

作りける例もあればといひ、漢學の道にも少し践み入りたればこそ、その故事を辨へられ侍れ、と稱せし詞端をおさへて、直にその路も云々と答へて、生昌を恐怖せしめしが如きは、是唯一時の諧謔のみ、奚ぞ賢らだちたる証とするを得べき。蓋し、納言は諧謔に富みたる人なりき。枕草子に、

中納言殿參らせ給ひて御扇奉らせ給ふに隆家とていみじき骨を得て侍れそれを張らせてまゐらせんとするをおぼろけの紙は張るまじければもとめ侍るなりと申し給ふ如何やうなるにかあると思ひ聞えさせ給へばすべていみじく侍る更にまだ見ぬ骨のさまなりとなん人々申すまことにかばかりのは侍らざりつと言高く申し給へばさて扇にはあらで海月のなりと聞ゆればこれは隆家がことにしてんとて笑ひ給ふ

又

雨のうちはへ降るころ今日も降るに御使にて式部丞信經まゐりたり例の褥さし出したるをつねよりも遠くおしやりて居たればあれは誰が料ぞといへば笑ひて斯る雨にのぼり侍らば足形つきていと不便にきたなげになり侍りなんといへばなどせんそく料にこそはならめといふをこれは御前にかしこうおほせらるゝにはあらず信經があしがたのことを申さゞらましかば得のたまはざらましとてかへすがへすいひしこそをかしかりしか

又草子に他より稱讃をうけしことを、多く書き載たるを批難せられしが、此も又失言といはざるべ

からず。固とこの草子は、その跋に記せる如く、唯里居の徒然なるまゝに、目に見え心に思ふとを敢て人の見るべきものならねばと、忌憚するところなく書きあつめたるものなり。されば、自已の稱讃をうけしことを多く記したりとて、何かあらん。斯ることを批難するは、恰も世人に、日記若しは覺書を記さん人は、自已が他より稱讃せられしことの記載を愼しむべし。これをなすものは、賢らだちざえかることを、こよなく面白きことに思ふ人なり、と敎ふるか如し。誰かその失言を憐まざるべき。誰かその不條理を嗤はざるべき。

越部禪尼の消息　井上頼文

越部の禪尼は、俊成卿の女にして、定家卿の妹なり、この消息は、新敕撰集を撰ばれし時、後鳥羽、土御門、順徳のみばしらの天皇の御製を、一首も載せまつらざりしを、むねと歎きたる消息なり、この消息よ、たゞに御製を載まつらざりしを、わかぬ事よと、おほよそ心もていへるのみにはあらで、いひしらぬ深き思ひはかりぞこもりたる、されば贈正四位平田大人のものせられし、玉襷といふ書に、貞永元年の頃は、三柱の天皇たち、なは國々におはし坐せる時なるが、此の年に定家卿、かの新敕撰集を撰び畢て獻られしに、右三院の（頼文曰、三院とは前のみばしらの天皇を申し奉れるなり、順徳院の御父帝、後鳥羽院を本院と申し、御兄帝土御門の院を中の院とまをし、順徳院を新院と申しまつれり）御歌をば一首

も入れず、鎌倉武士の歌を多く入られたり、是を以て井蛙抄に、此の集の異名を、宇治川集と云ふは、武士の多く入りたる故なり、と言へり、此は北條に畏み諂はれし故と聞ゆ、但し百錬抄に（賴文曰、百練抄は漢文なり、今便宜によりて假字交りとす）文暦元年十一月九日、中納言入道定家の卿、前の關白家に於て、新勅撰を捜覽す、兩殿下の監、頗用捨の事有り、百首を切り棄てらる、又入れらるゝ人有りといへりと有るを思へば、契冲法師が言に、此の天皇たちの御歌を入れざるは、許容無りけるか、關東の計ひか、此の事定家卿の意ならざりけるにや、百人一首の終りに、二人の帝の、ありがたき述懷の御歌を載られたり、と云へる如くなるか、若實に然ることにて殿下の監に從はれたるも有れ、既に前々年に、奏覽を經られし勅撰を、しか用捨せられしは、北條に諂はれたること論ひなし）此は我が言ふまでも無く、直にその女弟なりし越部の禪尼の消息に、新勅撰は中納言入道殿ならぬ人のして候はゞ取て見たくだに候はぬ物にて候、然ばかり感たく候御所たちの一人も入おはし坐ず、かたはらいたく打聞え候と見えたり（此は諸書に、俊成卿の女と稱せる人なるが、手弱女にこそ有れ、兄の卿には大く勝りて雄々しかりし人なり）と、ありて實に君臣の大義をえわきまへぬ、北條がしてわざを、大く憤りしものから、父の俊成卿も、兄の定家卿も、時の勢にひかれつゝありしかは、あらはにはうちいで難くて、風雅にことよせて、かくはものせるな

るべし。當時大丈夫だに、順逆を謬てるが多かるを、父にも兄にもたち越て、ひたぶるに朝廷の御衰をなげきまつれるは、いと忠實なる赤心よりいでしものから、學問の力にも依れるなりけり。（かゝるしたの心に博き學の力のそはりたれば、造次に書きやりたるこの消息だに、其意ことば、雄々しく、代々の撰集の品評もいと精細にして、歌よまん人の參考ともなりぬべき節多かり。）されば婦女の身なりとも學の道にいりたちて本と末との條理をわきらめさとるべき事にこそ。（越部禪尼消息）

人のもとへつかはせる文

まづいそがれ候ける、御こゝろざしあらはれ候て、集（續後撰集をさせることとなり）たまはりて候事、かへすぐゝもうれしうよろこび見候て、いたつらごとくおぼへ候つる、ながきためしのいのちも三たびまでみ候ぬる（三たびとは新古今、新敕撰、續後撰の三敕撰をいふ）歌にとりては、わえもの丶方にめだたく候けると覺候、さて御撰集のことがらは、たゞおりのまゝにおそれをはゞからで、詞をまぜ、かざる事候はず候、申候はゞ目のおよひ候にとりては、第一とこそおぼへ候へ、そのゆゑは三代集は、（古今、後撰、拾遺の三集をいふ）ことたかく世もあがりむかしもとほくへだゝり候て、詞のおよぶことにさふらふまじければ、さしおき候ぬ、そののち後拾遺は、よき歌あまりこほれて候ける世なれば、撰たてられたるやうげすしく候、金葉集、詞花（詞花集なり）ぎやうぐ\

なるやうに候、千載おちしづまりまことに勅撰がらはめでたく候、序なども候へど何とやらむ大やうに覺候、歌もいたうとゝのひたるらんともおぼへ候はず候、新古今又春の花秋の紅葉をひとつにこきませて、鳳池の秋月梁苑の雪の夜とかや、うたひしこゝちして、御手づからなる詞づかひまで、めづらしくけだかうおもしろく、京極殿のかな序など心詞及がたくさふらふ、ほどよりはみだれたる所も候やうに候、新勅撰はかくれでと候はず候、中納言入道殿(定家)ならぬ人のして候は、とりてみたくだにさふらはざりしものにて候、さばかりめでたく候御所たちの、(御所のたちとあるは、後鳥羽、土御門、順徳のみばしらの天皇を申せるなり)一人もいらせおはしまさず、そのことゝなき院ばかり御製とて候事、めもくれたるこゝちこそ候しが、歌よく候らめど、御つま點あはれたるは、いださむとおぼしめしけるとて、入道殿のゑり出させ給ふ歌七十首とかや聞ゑ候、かたはらいたやとうちおぼゑ候き、是は皇太后宮の太夫俊成の孫にて定家の子(民部卿爲家)にて、えり出させ給ひたる歌のめでたさ、次第書さまじへられてさふらふ樣、その世もしらぬふる人の、時々うちまじりてさふらふ、まくばりおき所、をどろかるゝけもなく、めでたからず、あまる所なく、たらぬかたなく、左へもかたぶかず、右へもたわまず、姿うつくしき女房の、つま袖かさなり、から衣のすがた裝のすそまで、鬢額髪のかゝり、すそのそぎうつくしう、裝のこしひかれたる

まで、おなうつくしやと、覺えたるを、南殿のさくら盛に立て並めてみるこゝちし候て、歌も上﨟しくも、けだかくもなつかしうたをやかにかけたるかたなく覺え候、本より詞の花の色句こそ父（定家）にはすこし劣ておはしませど、歌の魂は勝りておはしますと申候つる事顯れて、撰じ出させ給て候敕撰、いのちいきてみねぬる返々うれしく候、天暦四年とかや後撰（天暦四年は後撰和歌集を奏覽せし年なり）の後にて、序の候はねもよく候、いかなれど序にこそかたはらいたきことゞもゝいでき候へば、それに又後鳥羽院の御孫、土御門院の御子にてわたらせおはします、院（後嵯峨天皇）の御覽じさだめられ候と承り候へば、ちやわんのものにるりをかけて候やうにきよくうつくしうかたじけなく、あふぎて信もおこりておぼえて候、歌のことゞもゝ申たく候事おほく候にこそ、見參もしたく候へ、

よのつねはまたれし人も此春や
　軒ばの梅のかこたれもせむ

色々にさき候へど、にくいけして、うときも人はなどをりても申候ひぬ、かやうにそゞろごと、いくらも／＼申たく候、そらもおそろしく、天地四方の耳も、おそろしくつゝましく覺ね候へども、おもひ候事かたはしかきちらして候、よしとかれぬものにことよせて、とく／＼煙にませおはしませ、いのち候てかゝる御事をみきゝまゐらせ候ぬる、かつ／＼阿彌陀佛の御むかへのちかづき候と、たのもしく候、

雲の色のうすむらさきにひかりさす
　　　にしのむかへのおひ風やふく

秋風にみだれし露にぬれわかで
　　　きえなましかばと思ふさへこそ

あさましく候、いまは思ひおかるゝうらみも候はず、我君の（後深草天皇）御代を見まゐらせ候ぬれば、

空清くあふぎし月日そのまゝに
　　　くもらざりけるかげぞ嬉しき

又々便毎に申まゐらせべく候、のこりおほく候、

○このふみは、群書類聚に、収めたるものと、扶桑拾葉集に収めたるものとを、校合してあげたれど、猶いかにぞやおぼゆるふしの多かるは、いとあたらしくこそ。

楠公家訓（承前）　綠園主人

草木は、天性にまかする故、それ〴〵に花咲き、鳥は食を貯へぬ故、飛行自在なり。

綠園云。人は各其の處に安せざるべからず。薪こる山賤にして大臣たることをなし、大臣にして農民の爲すところをなさば如何、一國は治るべからず、一家は齊ふべからさるべし。士農工商各其の分に安んじ、其の職を務めざれば、社會はいかでか保持すべき。士となり、農となり、工となり、商となる、各天の與ふる所の職業なり。故に其の職業を務めざるは、天に背くなり。天に背き、いかでか、其の身を保つことをえん。草木の天性にまかせて、春夏秋冬それ〴〵

に花咲くと一般なり。

鳥は食を貯へぬ故、飛行自在なり。

綠園云。人の世に處して、心の趣くに從ひて、身を左右する事能はざるは、大かた金銀を貯へんと欲する念慮の甚しきによるなり。故に義として、此の處を去らざるべからざる事の起るも、牽戀して退く能はず、遂に辱を受け、耻を蒙るに至る、此其の心卑劣にして、淸潔ならさるに因るなり。凡、人たる者は、高尙廉潔ならざるべからず。高尙廉潔の人は、義に因て處し義に因て置す、生死を義と共にする故に、耻辱を蒙ることなく、英名を後世に遺す。其の心一片の野鄙拙劣なるものなし。恰も鳥の食を貯ふる心なくして自由に飛行することを得るが如し。天下の人、皆此の如くならざるべからず。

人は名利の爲につかはれて、一生を苦しむるなり。

綠園云。凡社會の人を見るに、多くは天性にまかせて、其の分に安ずることを得ず。故に往々一敗二敗復爲すべからざるに至る。又高尙廉潔にして、野鄙拙劣ならざるもの少し。故に往々、義に因て進退し、義に因て生死するものなきに至る。苟も利あれは之に從ひ、得あれば之に趣く、恰も蒼蠅の旨膏に就くが如し。起きて名を得んことに、奔走馳驅し。臥しては利を射ることに、苦心焦慮す。然して遂に、一生を苦しめ、名利の間に生死す。夫、此の如き人、何の爲に生れ、何の爲に死するか、苟も此の如くならば、生れず死せざるに如かざるなり。嗚呼、

人と生れ、萬物の靈たらんもの、名利の爲に一生を苦しめて可ならんや。

楢の舍歌がたり（つゞき）

富田馬太

珍しきもの

今はむかし文政の頃、大坂長堀の惣嫁某が、「わだし身の露のいのちの消えかねて草のむしろにぬれぬ夜ぞなき、」と口ずさみしこと有り。田中盧月といへる者、これを聞きて、こは尋常の女ならじといたく打驚きしを、云々なりと某に告げし者あり。某は、悦べる色もなくて、田中ぬしに知られぬるこそ、なか〳〵に心苦しけれとて、やがて「世をわたる難波のことのよしなきに身は浮草のねともとめず、」の一首をよみて、これを田中ぬしに見せ給はれとて、さし出だし、その後幾程もなくて、何處へ行きけん、行方知れずなりにけりとかや。思ふに此女は、何者かのなれの果なるべし。又江戸鮫が橋の辻君、とせといひし者の、「田毎あるなかにもつらき辻君のかほさらしなのうんのつきかげ」とならべしは、俗は俗なれども、趣向は面白し。又吉原の娼妓粧といへるが、月前戀にて、「さやかなる月の隈としなるものは人まつよひのこゝろなりけり」とよめるは、その調甚氣高し。すべて惣嫁、辻君」娼妓など一くちにいひては、耳さはりなる詞なれど、こゝの三女は、其心ばへ如何あらんと、なづかしうさへおもはるゝをかしや。余は世の聞こえを憚らず、泥中の蓮と稱へつべし。明和元

年の秋の頃、琉球の讀山王子が、江戸に參ゐ來し、時の、旅中の詠どもを見るに、往々感ずべきものあり。肥前國松浦にて順風を待たんとて、十日も過ごしゝに、「おひ手吹く風のたよりをまつ浦に幾夜うきねの數つもるらん」といへるは、一日もはやく江戸につきて、將軍の代替を賀せんと、思へる心情の切なさ、左こそと推し量らる。深草の里にては、「ふる雪に鶉のとこもうつもれて冬ぞあはれに深草の里」とよみ、伏見にては、「いつもかくかなしきものか草枕ひとりふし見の夜半の月かげ」といへるなど、何れも冬の景色のあらはなるにつけて、旅中の心細さの遣る瀬なきをあらはせる左ながら繪を見るやうなり。これ等は、かの國人にしては、巧なりと思はるれば。

似寄りたるもの

加賀の千代女とて、誹諧に名高きが、「うぐひすや近さに窓のあけられず」といへる句は、正徹が、「朝戸明ばおどろきぬべし呉竹の近き小板にきゐるうぐひす」と詠めると、全く相同じきをもて正徹のを翻案したるものならんと思はるれど、なほ左にはあらざるべし。米山沽涼が、冬川鵜の句に、「川づらの杭にぬれうの寒さ哉、」は夫木集爲兼の哥に「淸見潟あらいそ岩のはなれ鵜のなみにしをるゝつばさはすらし」を譯せし者なるべく、市野節士が郭公の句に、「ほとゝぎす親にかくして聞く夜哉」といへるは、後拾遺集なる小辨が、「ねてのみや人は待つらんほとゝぎす物思ふやどはきかぬ夜ぞなき」とよめるを想ひよせしなるべく、島野壽琳が、

隱家をことぶく軒のあやめ哉」は、公雄が哥に、「けふといへばあやめばかりぞふきそふる軒はふりぬる蓬生の宿」と有るによりて作りしものなるべし。かく探り出ださんには、古歌の誹諧に約められたる者、數限も有らざるべけれど、さては「わの月がないたかほと丶ぎす」ほど、人口に膾炙せるはいといと少き様なり。堀河百首月の歌に匡房が、「まこもかる淀の澤水深けれど底まで月のかげはすみけり」とよめると、顯仲が、「かもめ居る入江の水は深けれど底まで月のかげはすみけり」とは、全く同じけれど、何れも、各自の心の泉より涌き出でしものなるべし。享保の頃、園基香が即席にて、古寺鐘といふ題を賜はりしかば、「松風にかねのひゞきのおそひ來てありとしらするみねのふる寺と」よまれしを、法皇の仰せらるゝやう、これは近頃實陰の歌に、「春霞あら田の草のうもれ水ありとしられて蛙なく聲」とあるによりてよみたるにや。古歌をとるは好ましからぬとなれど、即坐なれば興ありと、御言葉あらせられしよし承まはる。されどこれより先に正徹が、「かすめどもありとしられて高砂の尾上の松にはる風ぞ吹く」なほこれより先には、後村上院御製に、「夏草のしげみが下のうもれ水ありとしらせて行く螢かな」「何々これより先に爲家が、「しげり行く野草がくれの沼水をひとにしらせてなく蛙かな」とよまれしなど、その句法甚よく似寄りたり。特に實陰の歌は、爲家のを摸されしやうに見ゆ。かくいひもて行かば、多數の歌集中には、詞も意も同じき者、濱の

眞砂のよむとも盡きぬ程なるべし。さはいへ、後に思ひ得たるものにて、先輩のに符合することも有るべければ、これは某の句に同じ、それは誰の歌に似寄れりなど、穴勝に押しわてがはんは非なるべし。同じ時によめるものだに、何れ菖蒲、いづれ杜若、と見まがはるゝほど、よく似通ひたるが多きをや。詮ずる所、人まねと、ぬすみとを避けなばよかるべし。

(づゝく)

(前回の正誤)耳あらはんさやは耳あらへさやの誤なり

初午祭　櫻園主人

てはこの譜に縁なきものゝ樣に見たまはんかたぐゝもわらめど、その由縁をいさゝか聞え侍るべし。

去年のきさらぎの初午の日のことなりき、遇然稻荷の大神をいつきまつれる小祠のまへを過ぎけるに、稚くうるはしき女の手をとりたる媼におへり、かの媼例の初午祭ののぼりにゆびさしていへるは、アスコノ、コンコンサンエ、オマヰリヲシテ、イキマセウと(こんくさんとは關の東方の小童兒らが狐のなき聲をよぶ通言なり)いふをよく見れば、彼のいつくしき女のわらはの侍女なるべし、見にくからぬ衣服きて、束髮てふかみに結ひたり、その女のわらはゝ、「よはひ大概六つ七つばかりなるべし、紫の道行ぶりに紅の袴を着けたり、おもふにしな高き人の令孃なるべし、かゝるもの知らぬ媼に、愛しき子が學校、幼稚園などのおくりむかへをまかせおきて、よろづかしづかせたらんには、いかばかりの非ことをか敎ふらんと、この一

つを以てもいと口をしく、うしろめだくおぼゆれば、せめてこの書よみたまふ稚きみたちには、さるひが心得わらせじとの心すさびになん。

二月の初午の日に稲荷を祭ることとの根原は、伏見の里なる稲荷山にます、三柱の大神をいつきまつりしが初めなり。世に稲荷は狐をまつれるものとしも、いさゝか書よみたる人にも、ひが心得せるが聞ゆるぞ口をしき。もし外つ國人の、この祭を見て、こは如何なる祭ぞと問ひたらん折に、こは我が國の古き俗習にて、野狐をあがめて福をいのるわざなり。されば赤飯に油揚など、すべてかれらが好む物を供ふるなり。いやしくも書籍のかたはしも讀めりし人のかりにもをろがむべき者には非ず。かゝる兒戯にひとしき所業はとゞむべき事なりなど、ダイアモンドのゆびわをきらめかし、ナポレヲン髯を捻り、シガレットをくゆらしつゝほこりがに對へんには、如何、わが國民としてはづかしく口をしからずやは。

されば神官めきては聞ゆれど、いさゝか其の由緣を記さんとす、そも〳〵伏見の稲荷とたゝへまつるは、山城の國紀伊の郡深草村なる福稲の山の上に鎮りまして、上のみやしろは大宮能賣の大神、下のみやしろは宇迦之御魂の大神、中のみやしろは佐田彦の大神にましまして。元明天皇の和銅四年二月の九日に鎮りませるが、その日たま〳〵初午に當れるによりて、永く祭日と定めたるなりといふ。

桓武天皇都を平安城にさだめ給ひてより、御代

〱の御尊崇厚く、醍醐天皇の御代撰せ給ひし、延喜の官牒にものせさせ給へる大社にまして、延久の四年三月の二十六日に、畏しこくも、後三條天皇の行幸ありて、幣帛をさゝけ給ひき、さて維新の聖代となりて、彼の粃政を往昔の風に易へ、時の宜しきに隨ひて制を垂し、上代の英風を流へんと欲し、廢れたるを興し、絶たるを繼きて、千載の今に闕けたる典を補ひ給ふ叡旨に仍りて、明治の四年五月十四日布告を以て官幣の大社に列せられ、官のみまつり仰せくだされ、奏任官をもて宮司に充てられたるみやしろにましてますを。さる尊きみやしろともおもひたらで、かりそめにも狐などゝ唱へまつらん事は、かしこしともかしこき事になんありける。

この大神は、衣食をまもらせ給ふが故に、世の人福参りとも云て詣づる人いと多し。紀貫之朝臣の延喜六年の歌に、二月初午いなりまうでしをるところと、はしがきせるもあれば、昔時よりまうづる人の多かりしことは知られたり。

またこのみやしろに詣づる人、手ごとに神木の杉を折りて、之をかざしつゝ家にかへりしといふ。

堀川次郎百首に

稲荷山しるしの杉を尋ねきてあまねく人のかざすけふかな　顯仲

又夫木集に

二月やけふ初午のしるしとて稲荷の杉はもとつ葉もなし　光俊

稲荷山杉の青葉をかさしつゝかへるはしるきけ

ふのもろ人　　知家

と見へ、猶此の外にも古歌おほかり。

東京にては、そを移しまつれる稲荷の社さはなるが中に、名にたてるは王子、烏森、三圍、半田、妻戀等なり、(清元の淨瑠璃に紀伊の國てふうたひものゝ内に府下なる稲荷の社名を多くつらねたり)祭の日は、町々小路々々の賑おほかたならず、繪馬(おほかたは、ふとくたくましき馬の、いましも嘶きて關門をいづるが如きさませるを畫がき、又は雌雄の狐が黄金白金藏めたる倉庫の鍵を咬へ二つ並べる間に玉をゑがけるあり。また玉にのせたるもあり。)提灯(酸漿とて色赤く、かたちちひさきも、白くはりたる大きなるに、狐の嫁いりなどいふものをゑがけるもあり)、行燈など飾り(繪ぎぬもてはりたるに雅麗なる山水の景色、また古きいくさものがたりに見えたる、英雄の肖像などまれ〳〵には見ゆれど、おほかたは美濃紙やうの紙に、さま〳〵の狂畫、はんじもの、地口、くちあひ、謎など、などいふものを畫けり)、二十五座、三十五座などいふ神樂を奏し、廣前には御酒、御饌くさ〳〵ものどもを、机しろに横山の如く打ち積みて、みまつりつかへまつるさまいと尊し。打囃す大鼓の音笛の聲いといさまし。

維新の前、まだ東京を江戸とよびける頃は、猶さかりなりしといへり。いま老人のものがたるを聞くに、此の日千社參とて(千社參と題せる滑稽冊子あるを見ても、わかうどだちが千日鬘をかふり、虎の皮のしりざやはめたる手遊の太刀をはき、ま

たは福助とよべる大あたまのはりこなどかぶりたるもありて、さま〴〵のをかしきふるまひして、わりけりとなん）稲荷の社々へ名札やうのものをはりて市中をめぐりあるく者多く、（題名とて「稲荷」などいふ紙ふだなり六年七月第二百五十六號の布告もて神社佛閣へ樂書する事を禁じ、つぎて十三年七月第三十六號の布告もて、きびしくおきてられしかは今は絶えたり、）またこの日小兒を手習の師に入門せしめたり、之を御弟子入いへりとぞ。また萬年講といふものありて、町内の小兒打ちつれて例の繪馬額と（額のへりに穴を穿ち、麻ひもをつらぬきて、門ごとになげ入るゝ如きさまして見せて行くなりと）淺黄地に白く正一位稲荷大明神しろく染めぬきたる、（旗）または白木綿に墨もて筆太にかきたる旗を、おしたてゝ其しるしとし町々家々の門をめぐりありきて、口々にイナリ（稲荷）マン子ンコ（萬年講）、イナリサンノオハツ（稲荷御初穂）、オジフニトオ（十二銅）アゲ（萬年講といへることは絶えて、其文字だにしらぬ、小兒が何の事ともしらで、今折々唱ふを聞けば、其のとなへはいさゝか替りて、イナリマン子ンコ、オイナリサンノオハツ、オジフニトオアゲ——、オアゲニトアゲ、トアゲノシタカラオッコチテ、しか〴〵などといへり）と唱へつゝ（十二銅とは、今の二厘錢三文を云ふ。維新前までは、この錢一ツ四文づゝにあたりしなり。）ゆけば家ごとに、オヒ子リ（御捻）とていまの二厘錢三文を半紙にひねりてわたふれば、チンチヨヤ（珍重）、チンチヨ（珍重）といはひはやし、若しわたへざれば

貧乏ビンボヤ、ビンボと、どよみはやして行きしと、さてそのあつめし錢もて、餅、油揚、密柑など買ひもとめ、廣前に供へたる後、くさ／＼のものどもを各わかちてくふ、こよなき樂みとせりとぞ。かくさま／＼にいつきまつるも、其の根原をたづぬれば、皆この三柱の神の神徳あふく故にて、三つの嶺の神の御ひかりは、萬代に消ゆる世あらじかし。

嫗物語くさ／＼　井原太郎

昔、西の京になにがしとかやいへるもの、夫婦窶して、竈の煙たえ／＼しく、長月の頃もすぎ、萩の下葉色づくに、鴈なきてくる頃しも、ねられぬまゝに、なにくれと身のまづしき事を、夫婦なげきものがたりして、なきみ、わらひみ、かたみに物語し侍りけるに、雁の一つら啼わたりて、いとゞ物わびしきに、秋のあはれを催しける折しも夫のいふ。あの雁をがな、我はらから、ゆかり有方へ贈りてしがなといひ聞えければ、妻きゝて、そなたのしたしきおかたばかり心さし玉ひて、我親、せうとのかたへは、言にだにも露の御情かけらるゝ事なし、あまりにむくつけなる人やなど、腹あしくあながちに云ひければ、夫も、何かと詞をわらし、いとどいさかふ聲、門の外まで聞え、左右の隣より人こぞりきて、とやかくと云ひなぐさめてあつかふ程に、町内の誰、かれ、あまたつとひ出て、いかなる事か、あらそひの一ふしにはなりぬるぞと、たつね侍りければ、妻のいふ。此亭主、

雁を五ツ、六ツもちて、我か方のしたしきもとへは、踈にして、我身の内の方へのみ、おくらむとしまゐらせしほどに、それを恨みいきどほりて、いふなりとかたりければ、群集の中に、目代とおぼしき人のいふ。我に、此事をうちまかせ給へ。二人のゆかり有かたへ、勝劣のなきやうにわけてまゐらすべし。まづ、その雁をこなたへたまはれといふ。夫、その雁は、空をわたる雁の事なり。今もし、あの雁が、我ものにならばといへる事なりといへば、町内の人、あるひは笑ひ、あるひは腹たて、夫婦して、我々をあざむきて、夜中に人を起し、せんなき事をいはせ玉ふかといふものも、有げりとかや。思ふ中には、ふし有るならひなれば、此いさかひも夫婦したしきが致す所なり。夫をば、わが佛のごとくし、又は、相敬如賓とてつゝしみうやまひ、ひんかくのごとくせよと、故人はいへども、あどなき事まで、かたみにいひなし、うらなくうちとけたるこそ、夫婦のほいなれ。三史五經の道々しき事のみ、博士のむすめのやうにいへば、はうけづき、くすしからむと、紫女が筆のすさみ、今さら思ひ出らるゝぞや。女はたゞ、心には、下行水のふかきつゝしみを内にたゝへ、外には詞を鶯の聲うるはしくして、形は楊柳になぞらへて、にくからぬこそよけれ。

元姫子は、都のひがしの洞院わたりにすみて、色好の女也。歌の道に心ざし、手なとつたなからず。よろづにつけつゝ優にやさしかりければ、わかきそのこども、文たまづさをつかはしけるに、露な

ひく色なし、こゝに、山名中務太夫の郎從に、喜家九郎といふ者見そめて、文をつかはしければ、いかゝおもひよりけん。なびきて、淺からずちぎりけるほどに、すでに五とせといふ明徳二年に、山名時氏、亂を起し、一族こと〲くうちいつて、内野の戰におよぶ。九郎は其母もろともに、元姫子を四條の道場に忍ばせて置たり。八幡にて人數の手配ありけるに、喜家九郎、びんの髪一ふさに文をそへて、女房のかたへつかはしけり。女房文をひらきみるに、こしかた行すゑの事ども書つゞけたる其中に、もしも、我此たびの戰に討死したりと聞給はゞ、もとよりの御事なれば、わふを別と、うぐひすの、もとの古巣へこそ歸り給はめ。たとひ、さやうにおはしまして、また、異人にまみえたまふとも、喜家九郎といふものに、しばしのよすがにたのまれて、むすびしかことの余波とは、ゆめ〳〵語りたまふな、さこそ草ばのかげの、くらき後の世までも、嬉しうおもひまゐらせさふらふべきなれとぞかき口説ける其奥に、

　わかれては又逢ふまでをおもひきや
　　かたみなりけり世のみたれかみ

泪のまぎれに、書みだしたる濃墨、薄墨しどろもどろにして、さだかにもなき此文を、九郎が母とゝもに、讀では啼、なきてはよみ、しばしが程はうちふしけるが、女房申けるは、薄情の人の心よな、此年月の有さま、さしもむつましく、みつからもまた、わりなく思ひたてまつり、むなしき苔の下までも、おなし道にと契りしか、今は弓箭の

道なれば、女の身にてかなはずと、書たる心のはづかしさ。九郎殿、もしうたれて後には、たとひさまをかへたりとも、よしや憂世のうきなみの、かゝる袖とはよもしらじ、かさねて人に新枕、ならぶましきの心をば、おなじ世にある其内に、かくとしられて、うき人に心やすく聞せむと、廿といふ年の春、みづから髪をおし切て、使の前にて、腰を梓の老の末迄、二張の弓はひかじとて、いまだ盛の身の花をなどか、をしまのあまとなり、中〳〵に、文のいらへにもことばはなくて、

一すぢにおもひきりてぞくろ髪の
　かゝるみたれの世をばうらみむ

とばかり書て、きりたるかみの海松房のごとくなるを返事にそへて、なく〳〵使にとらせたり。八幡にかへりて、九郎に此由かたりければ、餘りの心くるしさも、文にあやまりを書たり。よし〳〵、今は思ひおく事なし。心のまゝに討死せんとて、女房のかみと、文をを肌の守に入て、京都に赴き、内野の合戰に、山名宮内のつはものとたゝかひて、敵あまた討取、我身も終にうたれにけり。その首をみるに、左の鬢の髪、すこし切たる跡あり。生捕の者にたづぬるに、八幡より女房のかたへ、文をつかはすとて、鬢のかみ、一ふさ切て卷こめてのぼせしといふにぞ、記念の爲に切たりと、人みなあはれをもよほしける。もとひめ子は、九郎うたれとたりきゝしかば、今までは、さりともとこそたのみしを。此行末は、誰ゆゑに、命いきていあるへきとて、つひに自害してこそ身まかりしか。

月桂冠

本朝にて菅丞相の御はゝ君は、智恵ことにかしこき人にてましましけるとかや、及第といふは、儒者の智をみがき、天が下の物しりに、そなへしむる事をいふなり。之を及第狀元といふ。又落第とてしそんずる人は、大なる恥辱にする法なり。菅家すでに、及第にのぼりたまふをりしも御母君

久堅の月のかつらもをるばかり
家の風をもふかせてしかな

かく詠したまふ。及第にのぼる事を、月宮殿にたとへて、桂の枝をたをらしめて、名をえさせたきとの御事なり。菅家江家とて、我朝の儒家のたつとき人となりたまふ。菅丞相は、都良香といふ人に儒教をうけ、江家には匡房、菅家には道眞とて、世に有がたき博識多才の人となり給ひぬ。すなはち江家の末流も、今にあり。中にも菅家ハ常盤の松の千とせの色をまし、千里の梅のかうばしき、神風世々に吹つたへて、今山城國北野の御廟に迹たれ給ひて、天滿大自在天神と仰がれさせ給ふも、御母君の根によく培ひ、よく養ひたてたまひしゆゑなりとぞ。

妹脊島

妹脊といふ事は、夫婦の義をいふ説あり。又、兄弟をいふともいへり。いづれもふたつともに通じ用うべきか。或古書にむかし、土佐國畑郡に住む下種あり。をのが國にはあらで、こと國に田をつくりけるが、巳が國に、苗代をやう〳〵うべき

ほどになりければ、その苗を船につみてうゑん人どもに、くはすべき物よりはじめて、鍋釜鍬からすきなどいふものにいたるまで、家の具を舟にとりつみて、十一二ばかりなる男の子女の子、二人の子を、舟のまもりめにのせ置きて、父母はうゑんといふものやとはんとて、陸にあからさまにのぼりにけり、舟をばつながずして、置きたりけるに、此童子ども舟底にね入にけり。汐のみちひにつけて漂泛して、つひには此船沖へ出て、風にふかれてゆくほどに、あるはなれ島に着きぬ。人すまぬ境にて、子ども啼まどひけれども、父母きたる事なし。まして、そのあたりたにも舟のとふる所にあらず。嶋かくれに兄弟いて、なく〳〵いひけるは、船にあるほどは物くひ、命ながらへむ。されど、つひには糧つきなむ。いざ此苗を嶋の中に植て、からき露の命をつなぎて、二たび父母にあひみん事を、神佛にも祈りものしてむといひて、土よき所を見たてゝうゑけるに、その年植ゑし田みのる事父母の國にて、つくりしよりは、はるかによく出來たり。鍬鋤こと〴〵くもたりければ、木きりて庵など作り過しけるが、後には子孫あまたさかえ誇りけり、大なる嶋にてありければ、田畑おほく作りて、此ころは、その妹脊がうみつゞけたる人とも、嶋にあまる計になりてぞあんなるといへることを聞き、世には、かゝる所もあるものにやなど思ひしことありしか、今より考ふれはいとをこなる事にそありける。

希有の縁

いつの頃にやあらむ。遣唐使のもろこしにある間に、妻をもうけて、子を産せつ。その子、いまだいとけなき程に、夫日本に歸る。妻はそれよりこひわびて遣唐使のくるごとに、消息やあるとたづねけれども、あへておともせず。されば、妻大にうらみて、ちこの首に遣唐使某が子といふ札を書きて結つけ、すぐせあらば親子ゆき逢ふことあらんといひて、うみになげいれてかへりぬ。ちゝある時、なにはのうらのほとりをゆくに、澳のかに鳥のうかびたるやうにて、白きものみゆ。ちかよるまゝにみれば、童に見なしつ。あやしければ、馬をひかへてみれば、いとちかくよりくるに、四ばかりなる、兒の白くをかしげなる、浪につきて、寄きたれり。馬をうちよせてみれば、大なる魚の脊にのれり。供人にいだきとらせて見ければ、くびに札あり。遣唐使それがしが子とかけり。さは我子にこそありけれ。唐にていひ契りし兒をとはずとて、母がうらみて海になげ入たるが、しかるべき縁ありて、かく魚にのりてきたるなめりと、あはれに覺えて、いみしうかなしくて養ひ、遣唐使行きけるにつけて、此由をかきやりたりければ、母も今は、はかなきものに思ひけるに、かくと聞きて、希有の事なりとそよろこびける。さて、此子ほどなく人となり、手をめでたく書きたり。魚にたすけられければ。名を魚養とぞ付たりける。七大寺の額ともは是がかきたるなり。世俗にいふ。弘法大師稚き時手習の師なりとぞいとい。ぶかし

き説なれど。

山姫

或人のいはく。備前の岡山に在りし時、山家へ行きてあそぶ。そこなる人の語りしは、殺生の爲にある時、深山へ分入りしに、年の程廿ばかりの女房、まゆ麗にして、世にたぐふべきやうなし。色めづらしき小袖に、黒髪の尋常に、にほひやかなる分野、あるべき人とか見えず。かかるたつきもしらぬ山中に、おぼつかなくも思ひければ、鐵炮とりなほし、眞正中をうつに、右の手に之をとりふかし、草の唇に莞爾と笑めるありさま、なほすさまじくぞありける。さて、ふたつ玉にて藥こめ、手まへはやくはなつに、之も左の手についとりて、さらぬ躰に笑ふ。このときにはや手はつくしぬ。いかゞあらむと、おそろしくいそぎて、かへるに追かけもせず歸りしなり。其後年長たる人に語りしに、それは山姫といふ者ならむ。氣にいれば、寶などくるゝものといへ。りされど、寶は貰はずもあらなむ。

あらひばり

笠雪子

第二回

お花男に連れられて滊車に乘り、新橋の停車塲に着きぬ。これより人力車に乘りて





銀坐通りにかゝりけるに、幼くして父と共に來りし時とは大に異りて、繁華雜沓に目も眩まんばかり。人力車の人馬車などにつきあたりはせぬかと、車の上には絶えず心配の輪をめぐらして、京橋日本橋をいつしか後になして行きけるに、程もあらずして、下谷御徒町のとある門前に着きぬ。男此處といふに、お花意を得て人力車を下り、黒塗門の樣を見て、可なりの御屋敷と思ひしかど、肝要の標札すらりと讀めず。それなりにして男の後に從ひ、臺所に到れば、頬赤きおさんは竈の側に立ち居れり。二人を見るより手襷とりて一禮なすや否や、奥の間にかけ入りてお松といふ下女にかくと告げけり。

男とお花とは、少時臺所の隣りなる一間にやすらひ居たりしが、お松其間に入り來り挨拶をなして、さて、唯今奥樣が御逢ひなされますれば、此方へと案内するにぞ、お花は男と共に、御坐敷の次の間と覺しき處に入りけり。

三十五六とおもはるゝ品よき奥樣、先づ男に、いろ〳〵世話になりたりとの御挨拶。男お花を奥樣に紹介すれば、お花丁寧に御辭義して、よろしく願ひますと羞らひていふ。奥樣、お花をつく〴〵見られ、今迄如何なる事をなして居たるか、年齡は幾

許か、など問はせられ。殿様もやがて御歸りなさるべければ、其上にて御目にかゝるべし。彼方にて休息されよと、優しき御言葉に、お花嬉しく如何申し上げてよきやらわからねば、唯有り難うござります。

轆々たる車の音玄關に響きて、御歸りと車夫の勇しき聲に、奥様殿様を御迎へに御出でなされて、今お花が參りましたと言はるれば、洋服脱がぬ前に烏渡會はんと、殿様の仰せに、お花御前に出づれば、是より苦勞との御言葉。奥様にも劣らぬ御情深き御方よと、もつたいなくも、あり難くてたまらず。こんな御屋敷なら一生にてもつとめたしと、思ひてお花やう〳〵に首をあげて臺所へぞ退きける。

男歸らんとする時、お花門まで送り、世話になりし謝禮を述べて、御屋敷の名は太田、殿様は義康、奥様はよし子さまと、きゝて左様なら田舎へも御序によろしう。

太田家にてお花小間使となり、萬事お松に差圖をうけて、當初は東京且は御屋敷に馴れぬ身の心程には用事出來ず。鯛一尾を何圓といふに驚き、奥様の御めしものは何なるかと、お松に尋ねて笑はれし事もありしが、月日うつりゆくに從ひて様子變り、可笑しき相州訛り怪我にも言はず。身なりもさつぱりと垢抜けて人の目につく

様(やう)になりにけり。

文林

橋邊霞　東久世通禧

春(はる)の日のなからの橋(はし)のあさかすみ
　夕(ゆふ)くれかけて立(たち)わたるらむ

若菜　岩下方平

百敷(もゝしき)の大宮人(おほみやびと)につまれてや
　千代田(ちよだ)の若菜(わかな)もえまさるらん

若菜　黒田清綱

老(おい)か身(み)もむかしの春(はる)にかはらぬは
　わか菜(な)つむ日のこゝろなりけり

雪中竹　三上一彦

やゝよわる力(ちから)しられて降雪(ふるゆき)に
　風(かぜ)も末(すゑ)ふすそのゝくれ竹

うれしきもの　小池道子

かなし子かまなひの道(みち)のこゝろみに
　ゆるしの文(ふみ)をもてかへりたる

親　税所敦子

老(おい)てのちおもひしるこそかなしけれ
　この世(よ)にあらぬ親のめくみを

楠氏の室　師岡正胤

はゝそはのかけによらすはおひたゝト

世にあふかれし楠の若木も

袈裟女　佐々 豐水

なびかしとふしとをかへし女郎花
けにうるはしき色にあるかな

女鑑　井口 鶴子

女鑑まさめにむきてうつしても
はぢぬすがたをよそひてしかな

親　花井 魯禪

明らけきみよにすみても子のためを
思ふ心の闇ははれまし

すまの友（承前）　何たに子

二十日　天氣よし。策郎、武らを引つれて、神戸へ行たまふ。日置師をとはんとてなり。をりあしく居られず、耳しひたる老婆の取次に出たれは、手まねしていひおきたまひぬとぞ。

廿一日　天氣よし。賀古河にゆく。こゝより手車にのりて、をのへの觀音寺にいたる。あるしの僧は、さきに別府の法會に行て、夜にいらねはかへりこぬといふ。徒にかへらんも、ほいなきこゝちのせらるれは、取次のいふかまゝに、おくへとほりて、そこゝをみるに、いと淸らかなるすまひなり。ことに茶室は三疊大目にて、庭の植こみなども、おのつから苔むして、よのちりにけかれぬさまみゆ。さてあるへきにあらねは、賀古河より一時後の滊車にてかへる。

廿二日　雨。日置師、又觀音寺の泰童師つれたちてとはれたり。ことに泰童師は、茶箱をたつさへ

玉ひて、みつからてん茶してすゝめ玉ふ。心さし浅からぬ禪師になん。

廿三日　天氣よし。夕かたより雨風はけし。

廿四日　くもり。此はとより、かたらひし地所かひ入のことゝのふ。

廿五日　天氣よし。武西京の徳永文學士へ入學のことゝのへり。よろつ都合よきよし。古谷僧正よりしらせ玉へり。

廿六日　天氣よし。あるしの君、もとのことしゝも付玉ひて、いとすこやかに成玉ひしかは、今はかへらんとの玉ふ。をりから月のさやかなりければ、いと名殘をしうおほゆ。

廿七日　天氣よし。いよ〳〵出たつ事にきはまりたれは、とりちらしたるものなととりかたつくるに、こよひも月のさやかなりけれは、

すまの浦にかはかり清き秋のよの
　月をのこしてかへるわひしさ

すまの浦よことになれにし月影の
　なとかれかりに樂しかるらん

かへるへき時はきたれとすまの浦
　月にこゝろののこりぬるかな

松のはにおきたる露のしら玉を
　月のしづくとおもひけるかな

松かせに雲はらはせてすまの浦
　ひかりをはなついさよひの月

すまの浦ちりもくもらぬ月影に
　おきの小舟のかずそしらるゝ

すまの浦月の夜ころのけしきをれ

いひつくすへき言のはなかな

あすはとくたゝんと思へはすまの浦
こよひの月にねられさりけり

しほたるゝあまとなりても秋ことに
あくまてみたきすまの月かけ

廿八日　天氣よし。朝九時滊車にのる。をくりにとて策郎、武、大工の松兵衛など神戸に來たる。武は學校に入れんとてのこしをくこととなれは、さき／＼の事どもいひきかせ、又しはらくあはぬことゆゑ、よくかほなと見ておかんとおもふにも、たちまちなみたくまれぬ。われなからかはかり心よわしとは、今のいままておもはさりき。かくて人々にいとまこひなとするまに、滊車ははしり出ぬ。今宵はいつこにて月をみるならん、策郎、武なとは、今ころさそさひしからんなとおもひつゝけなから、

おのかのる車は早くはしれとも
こゝろはあとにひかれぬるかな

いつしか日はくれて、名古屋にいたる。こゝにても月を見んとて、むかひの山を見れは、半あらはれたるか、みるまにのほるけしき、車のうこくをもおほえず、また今切の入江の波のきらめきて、ひるよりも一しほのなかめをそへたり。

くもりなきこよひの月を海山に
なかめなからに行そたのしき

ひるみてもなかめはふかき今切の
入江にうつるもちのよのつき

海山にところをかへてふくるまて

みれどもあかぬもちのよの月

十時過るころ、はま松の花屋といふ宿にとまりて
あすの廿九日夕かた青山の家にかへる。
わすれぬためと、日々しるしし反古をみるに、
日記めきたれは、かりに須磨の友と付名侍る
を、後見ん人は、をこがましとや笑ひ玉はん
かし。

たに子しるす

此日記を見てよめる

われもいさ行てやすまんすまの浦
うをつるもよし月みるもよし

資之

雑報

●梅のたより　家並しげき都の中には、谷間を出づる鶯の初音は、聞くべうもあらねど、梅花の信は人傳にも知られぬ。日刺し善きあたりは、はや南枝に點々笑を含めるがありて、訪ひ來ん人を待つもありとか。孃等よ。行きては見給はずや。其の色香を愛づる爲にはあらずして、その節操を見に、「獨は行かずして、必嚴父に伴はれ、慈母を導きつゝ、其の心を慰めがてら、」

●肩身狹き女　四布風呂敷の大さなる、海老茶色の肩かけに全身を包みて、廣き大路をすぼまり歩く。寒さを防ぐ爲めにと見れば日は稍暖にして、傍なる老女も、只頭巾のみを着く。重には見ぬの

爲なるべし。自はいみじとも思ふらめど、世の人は美しとも言ふらめど、然思はで、寒からぬに身ぶるひさへせらるゝは、吾人が心の偏僻めるにや。さるにても、まこと寒き時などに、伴はるゝ母には何も無くて、已獨のみこれ着くるを見たらん折の心地よ。惡しとは誰しも思ふ所なるべし。常の心持てらむ程の女ならば、自耻らひて、汗もあえぬべきを。さてこそ、誠に肩身は狹かりつらめ。

●詞づかひ　近頃、女學生の中に、一種の詞づかひ流行せり。「なさりましたか」といふべきを、「なすッて」と云ひ、「行きましたよ」と云ふべきを、「行ッてよ」と云ふが如き、其の他數ふるに遑あらす。此れ等は、卑陋なる詞つかひなるが上に、自他の差別さへ轉倒せり。二三年來國語文典いと盛に行はれぬれは、何處の女學生も、一通りは學ひ給ひつらむ。然るを、猶改めんとし給さるは、あやしむへきの限りなり。うかれ女、はしたなどとはとかはれり。物學に志す孃等少は心し給へ。

●みだれ髮　此もまた女學生中に流行す。寸暇なき學生に取りては、束髮も便利ならむ。されども、束髮のみだれたるは、まして、見ぐるし。每朝口を嗽き、髮を修むるは、修身の禮なり。決して洒灑には非ず。さりとて、新に結ふには及はす。櫛を以て、亂れたるを修むれは、可なり。父兄に對し、朋友に交り、教師に接するに、髮の亂れたるは、失禮なる者なり。又其の人の心さまも、大かたおしはからるゝものなれは、務めて注意し給ふへし。

●今は昔　それの處に女學校ありけり。多くの娘子の中に、梅子と、松子といへる二人なん、いとすぐれたりける。學びの業はいふに及ばず。心ばへ優にいみじかりければ、時世の婦女にも似ずとて、はめぬものなんなかりける、そのをり誰いふとなく、

　春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ

　露じもになべて色づく秋山の麓のまつぞひとりさめたる

とうたひけりとぞ。

●後の昔　それの處に女學校ありけり。をしへつかさと、をしへ子との中らひいと睦ましかりけり。されど、あやしき聲の聞ぐるしきまでたちそめて、都童の口の端に上れり。そのあやしき聲の一ッならで、二ッ三ッまで聞えたるをりに、

　村雨の露もまだひぬ槇の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

とぞ人々はうたひはやしける。二三年の程へて後にその事はきえたれど、聲のみは殘りければ、又

　瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

とうたへりとぞ。こは歌がるたより事起りしにもあんなんとて、時の人の語り草なりけり。

●女たちの言語文ことば　女たちの漢語うちつかひたる、いと聞き苦しき物にてぞあれ。男めかしうて。生意氣らしうて。夜更けたるに、唯二人ばかりして、洋語とやらんにてうち語らひつゝ

ありくなどは、壯士とやらんが女の裝したるにこそと思はる。男もしかはあれど、女たちは殊に耳だゝしからぬ、例の言語にてこそ、總てうち語らひなどあらまほしけれ。文ことば將しかり。物識りめかしう書きたてたるは、實にかたはらいたく、きたなきもの、はきちらさまほしき心地せらる。彦麿翁の隨筆かたびさしに、當時世に名高き或書家の女或高貴の御室の御側に仕へぬるを、早くより我を召て御歌の添削仰給ふ序に、その女も歌よみ出だしたるをいぶかりしに、傍に御局ありて云く、この女の父の、女にいへるには、御舘にて和樣文字かく人にたよりて手習すべし。歌よむ人あらば隨ひてよみ習ふべし。少女の漢樣文字かき、詩文章つくるは、傍よりつらにくゝ思ふものなり。和樣文字かきて歌よむ女は、ゆかしくなづかしく思はるゝものなりと、いましめしよし語れり。からぶりの書家には、めづらしき大先生なり云々。と見えたり。かゝる父女こそ世に多くのぞましけれされど又ひたぶるに。このごろの如く消息文にさへ、いぶせかりしよひの雨のいつのまに降りかはりけんちり塚の宿となり果てし庭もせも白妙に埋みたるさまねもいはずかゝるけしきを家にのみ見むはむとくならんかし、など書きたるを見れば、古き物語などの　心地せられて、うたて見る目くるし。消息文には消息文の体ありぬべければ、と物しらぬ心には思はるれど、むとくならんかしなど書くが、今日の消息文の体には。さてもふみことばなめげに見ゆるはあらじか。

（愛馨投）

餘芳

星月夜物語

愛馨散史

蛭ケ小島

左衛門局のこの度の住居こそ、實にいと〳〵わびしげなれ。このところを蛭ヶ小島と呼びたるも道理なりけり。前には狩野川あり。後の方には江河といふあり。狩野川より出でゝ狩野川に注ぐ。島のうちは一面に竹生ひしげり、竹より竹にまつはれる蔓の枯れたる、はたいと所えがはなり。中央にさゝやかなる葺家あり。そこに局は居給ふなり。

うべも昔よりかはりやすきものゝ譬には、必ず秋の空をひきけんよ。竹の葉の僅の間より洩りて來りし夕日影も、乍ち雨にうち消され、蔓の葉などに降りつけてそよろ〳〵といはせたる、甚物淋しげあるに、虫の聲さへあはれを添へぬ。

身は習慣のものにぞありけると、昔の人は慨かれたれど、そは手枕の隙間洩る風ばかりのことにて、世の憂事はこの外なりけり。

とうちつぶやく局は、早や一年あまりのわびずまひに、御髪は蓬生の如く、衣服も垢つきて文も見えず。唯御顔ばかり涙のひまなくあらふ故にやあらん。もとにもまして白く、痩せたれば、少し勇々しげになり給ひたれど、いまだ比類なき艶美はそこなはれず。

この頭韮山の城主は、北條伊豆守といふものなり。大政所には正しき甥にて、相模守の義子なり。容姿も人に勝れ、才智はた賢かりければ、相模守も殊に之を愛しみ、萬のことうち語らひけり。大政所も修禪寺の君よりも、愛しみて思ひたのめたり。その局の鎌倉をいでしより三月ばかりありて、相模守の許えて韮山の城に皈りぬ。その後は鎌倉にも上らず。一向國の政事を行ひ、折にふれて忍びやかに局を問ひ慰めけり。局も。最初は北條殿の由縁のものなることは知りたれば、快からず思ひしも、

懇に訪ひ慰めらるゝにつけて、少しは思ひたのみけり。箱根の關にて縛められ給ひし時より大政所は疾く斬に所せよと仰せ給ひしを、伊豆が命にかへてさてはこの蛭小島に流され給ふことゝはなりたるなり。このはかなき御住居は、いと心苦しかれど、大政所の仰せなれば術なし。局の罪なきことはわれよく知りぬ。暫時經なば大政所の心も解けなんかし。唯その折を待ち給へなど、常にいひ慰めけり。恩にかくるさまにはあらで。

日の暮れしころは、雨も小やみになりたれど、靜に軒端をつたふ雫のをともいとあはれなり。局は雨につけ風につけて唯權中將のことのみ思ひ煩ひ給ひ又このところを脱け出さまほしう思ひあはせれど、此度捕られなばゆゝしき恥あらん。自死せんにも警固のあれバど、わづかに伊豆がことばを力に折を念ト待てど、これとて限りもあらず。君のおはしどころの近しとおもへばにや、あやにくに思はつのり、苦しくのみその日を經過し給へり。清野のことさへ思ひまつはる。されば端の雫もなげ

ゝとておとするにはあらざめれど、ひたすらうらめしう聞かれ、燈と消ぬも入りたき御さまなりき。

折しも伊豆守不圖來りぬ。いとうれしげに、

局よろこび給ひてよ。伊豆が數度大政所にねぎ申しゝを、あはれとや思し給ひけん。今日なむ、御許の使來りぬ。明日は韮山の城にうつり給へ。今年の中には、鎌倉に皈らせ給ふやうになしまゐらせん。明日つとめて公の使さしおこしぬべけれど、疾くこのことを告げまほしうて、今宵まづ忍ひて。

とげにいとうれしげに述ふ。局はほけたるさまにて、

伊豆守何事の給ふぞ。君の御傍にゆき、朝夕の物など調せとあらば、いとうれしかるべし。韮山にゆきて何かせん。惜しからぬ命も君の御ためにこそながらふるなれ。鎌倉などまして思ひもよらず。

など答うちする折から、竹のしづくのはらはらと、後なる窓にあたりければ、伊豆守はそなたを見つむ。局は例の頭をたれたり。

（つゞく）

をしへの庭

明治廿五年前半期月次歌文題

一月廿日兼題
歌題……殘雪
文題……探梅の記

二月五日
歌題……禁中梅
文題……若菜を人に贈る文

二月廿日
歌題……紫式部
文題……袈裟御前の傳を讀む

三月五日
歌題……行路柳
文題……燕のかたに題す

三月廿日
歌題……春旅
文題……人の子うみたるを祝ふ文

四月五日
歌題……待花
文題……野あそび

四月廿日
歌題……寄花述懐
文題……春を送る詞

五月五日
歌題……更衣
文題……竹亭夏來

五月廿日
歌題……寄橋懐舊
文題……歌のあけつらひ

六月五日
歌題……故郷郭公
文題……螢狩の記

六月廿日
歌題……清少納言
文題……ピアノと琴といづれかまさる論

本誌の發行を毎月二回とあしぬるにより、歌文の兼題も、二題つゝ設けたり、さて、五日の分れ、前の月の廿五日までに、廿日の分れ、その月の十五日までに、送り給ふべし、

待鶯

梅の花かすよむはかりさきしより
　まちこそわたれうくひすの聲　廣田とめ子

まちわぶる心もしらすうくひすの
　なと初音をばをしむなるらん　高井孟子

我やとの園ふの梅のさきしより
　またるゝものは鶯のこゑ　柚原まさ子

鶯はとくこそ來鳴け我やとの
　梅のはつはなはやさきにけり　加納由良子

春たちし今日の心をいかにせん
　鶯たにもなかすもあるかな　赤座ぎん子

鶯のはつねまつ身は軒の梅
　咲にはへとものとけくもなし　佐々有鄰子

はつこゑをまちかね山の鶯は
　さゝなきたにもうれしかりけり

春くれと風またさむし鶯は
　今幾日ありて初音なくらん　大手さよ子

ねくらにと植つる梅はさきぬるを
　など音つれぬ谷のうくひす　江崎みさ子

との人もなき我やとは鶯の
　なく音まつより外なかりけり　安藤すゝ子

鶯のきなくおそしとまちかほに
　垣根の梅もはなさきにけり

香をとめてはやもとはなん鶯の
　去年のねくらの梅さきにけり　師岡千代子

梅さきぬ雪消ぬはてぬわか庭に
　初音きかせよ春のうくひす

まち〳〵し梅さきにけり鶯よ
　春の初音は我か宿になけ　師岡すか子

かけともゝそともゝ梅の花さきぬ
　まちこそかぬれ鶯のこゑ　澤田春子

ねくらにと植しのき端の
　梅咲ぬはや音つれよ谷の鶯　鋼　子

たに深き雪のふるすを立出て

みやこのはるにきなけ鶯

江崎まさ子

梅の花とく咲くやとは鶯の
こゑいとゝしく待とはしかれ

鶯のなかむをまちて我やとの
梅のはな見にともはよはまし

簾をかけて雪を見る記

山名ます子

けふは、朝の程より、雪いたくふりいてぬ。いと物しつかなれは、文机にむかひて、枕草紙なと取りいてゝ、よみつつありしか、かくなんめてたき雪のふるを、こもりのみ居たらんは、はいなきわさにこそとか、の清少納言にならふとにはあらねと玉たれのはしに出てゝをすかゝくれは、ちりくる雪の二ひら三ひらそてにかゝりたるもをかし。外面のかたを見わたせは、かの白かねのよともいひつへく野邊も、山邊も、さとの方も、白たへにそなりにたる。木〻につもりし雪は枝にあまりて落ちり、園生におひし小松は、猶ならねともさなからわたをきせしか如し。されと、ときはの色かへぬさまは、千代もへぬへきみさをのみにて、いとくめてたし。ひとむらしけるなよたけは、ふりつむ雪におきもえあからす、おもけなるも、したをれせぬは、是もまた世々にさかゆるねさしならん、とめてたし。折しも、軒端にさへつるむらすゝめの、いとさむけなるも哀れときく程に、さと吹來る風の身にしみて、たへかたけれは、ふたゝひすたれおろして、いさゝかかくは物しつ。

同

大手小夜子

埋火の外には友もなう、徒然なる折しも、學の友の訪ひ來ませるに、打よろこひ、種々の物語しつ。彼の枕の草子の、面白く作りて、雪の山ふりせぬ跡を世にのこしけんなと、云ひのゝしるに、いつしか空はかき暮れて、雪の降出けれは、いかて深く積らせてしかなと、ねんしつゝ清少納言のふる事にしならひ、をすかゝけて、端近うゐさり出て、外面の石燈籠に火をともすに積れる雪に光りあひて、いと面白く、處せき庭も、はえある心地して、

降雪に梢の花は見えねとも
梅か香のみは埋れさりけり

うつしゑも、いかてえ及ふへきかはとめてつゝ、言葉の花ともよみいて、心ゆく限り、打興して、なくよなかりしを夜も深くなりぬ。いさとて友の歸りければ、窓の文机に向ひ、清女の筆のあとならで、こち／＼しけれと、いささか今日のあはれを物にかいつけつ。

同　　江崎みさ子

よへよりの寒さもしるく、今朝は、霜かれのいぶせさもかくろひて、見所ある庭のさまなり。されど、なほ小やみなくふる雪に、たれこめて、今日來ん人をなど、ひとりこちつゝある折しも、外のかたに、雪ふみわけてとずんしつゝ、柴の戸に音なふものあり。立出て見れは、親しき友かき、三人まてうちつれて、とひ來れるなりけり、火桶に炭さしそへ、まど居して物かたりす、なかに年すくれたる友人、所をわけぬ雪なから、かゝる山里めきたる、御住家こそ、ひとしほ見所もまさらめ、かつは、もろともに、ふみにてもかきかはさむと、かういとひたまふ跡つけておとないふ。などかは、かゝるところに、一人なかめくらすは、いとさう／＼しう、物のはえなくなむなどいらふ。埋火に顔あかうなりたる友人、いでや、香爐峯の雪はいかにといふに、かたへにたはふれ居りし、をさなき妹、はしりいてゝ、すだれかゝぐるもいとほこりかなり。人々手をうちて、めできこゆ。いつのまに晴れにけむ、日かけの、しろうつもれる上に、まはゆきまで、光りあひたる、こよなうめづらし。遠く見渡せは、白妙のふしの高峯の、雲井はるかにそひえたる、またゝぐふものなくなむ。

むさし野の草のいほりのしのすだれ
かゝけてふしの雪を見るかな

やがて、こを題にて人々ふみかく。折しも門邊をすくるものあり、芙蓉峯の雪も、簾をかゝけて見ると、うちずんしたる、所から、折からにやわらむ、またなくをかしうなむ。

國光第三卷第七號

目錄

女鑑第七號目次

(遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麹町郵便局へ御振込可被下事○郵便券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し强て領收證を要せらるゝ方ハ別に證書郵送料御送附の事○未税の來書ハ一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
全國無遞送料
廣告料 五號文字廿三字詰 一行十錢

明治廿五年二月四日印刷
同 年同月五日出版

東京麹町區平川町五丁目十六番地
發行兼編輯人 西澤之助
同 印刷人 長屋基彦
同 發行所 國光社